

You, Unlimited

Annual Activity Report 2025

Fieldwork : Toward Social Coexistence



龍谷大学 社会学部

2025年度 社会共生実習 活動報告書

目次

ご あ い さ つ.....	2
地域エンパワねっと・大津中央.....	3
農福連携で地域をつなぐー「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」.....	13
お寺の可能性を引き出そう！ー社会におけるお寺の役割を考えるー.....	21
障がいがある子どもたちの放課後支援.....	36
コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト.....	42
発信情報.....	61

ご あ い さ つ

2025 年度 実習担当（社会共生系）学部長補佐
大西 孝之

社会学部が深草キャンパスに移転して初めての運営となった 2025 年度の社会共生実習は、5 つのプロジェクトに 28 名の受講生が参加しました。本年度も地域住民・自治体・企業・団体のみなさまのご理解とご協力を賜り、受講生は各プロジェクトの担当教員とともに、現場における諸課題の探求とその解決に向けた実践的な学びに取り組むことができました。衷心より御礼申し上げます。

深草キャンパスへの移転により、教職員および受講生は新たな環境のもとでプロジェクトを運営することとなりましたが、本年度も関係各位のご支援を得ながら、各プロジェクトにおいて受講生は現場の具体的な課題に主体的に向き合い、多様な実践と学びを積み重ねることができました。

本報告書では、各プロジェクトにおける 1 年間の取り組みとその成果をまとめております。ご高覧いただき、本実習の活動を通じて、現代社会が抱える諸課題への理解を深めるとともに、その解決に向けた取り組みの一端をみなさまと共有できましたならば幸甚に存じます。

今後とも本プログラムのさらなる充実と発展のため、引き続きご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2026 年 3 月

地域エンパワねっと・大津中央

担当教員：脇田健一

(1) 取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトの前身である「地域エンパワねっと」は、2007年度、文部科学省の「現代GP」（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）に採択された地域連携型教育プログラム「大津エンパワねっと」のもとにあるプロジェクトとして始まった。この「大津エンパワねっと」の目的は、社会学部が立地する滋賀県大津市における「地域活性化」、本学部で学ぶ「学生の学びの質の向上」、そして社会学部における「教学改革」にあった。また、教員が学科の壁を超えて教育指導上の連携を行いながら、学生と地域住民の皆さんが直接出会い、地域課題解決のための活動に向けて協力し合うことを通じて、相互にエンパワメントされ（潜在化したお互いの力を引き出し合うこと）、学び合う関係を創出することを目指した。そして、この「大津エンパワねっと」が起点となり、2016年度カリキュラム改革において、多くの講義系科目の相互乗り入れと「社会共生実習」の実現につながっていった。

新たな地域連携型教育プログラムである「社会共生実習」へと移行した段階で、複数の教員によりさまざまな内容と指導方針のプロジェクトが用意されるようになった。ただし、本プロジェクトについては、「社会共生実習」に移行した後も、2007年度から開始した「地域エンパワねっと」と同様の教学上の基本方針を継承している。その特徴は、学生が取り組むべき課題を学生自身が地域社会の中から発見し（課題発見）、学生が地域住民の皆さんと協働して実際の課題解決のための実践に取り組む（課題解決）という点にある。ただし、このような「課題発見×課題解決」型のプロジェクトに取り組むことは、多くの学生からすれば極めて難易度が高く感じられるはずだ。それは、通常の大学の授業とは異なり、学生個人がひとりで努力するだけでは、良い成果を生み出すことはできないし、達成感も獲得できないからである。

本プロジェクトに取り組む受講生たちは、通常の授業でおこなわれるディスカッションや意見交換ではなく、「課題発見×課題解決」に向けての話し合いを1年間継続していかなければならない。このことは、「地域エンパワねっと・大津中央」に限るわけではないが、「社会共生実習」のプロジェクトでは学外や授業以外で活動する必要があるため、そのための時間を、他の授業、課外活動、アルバイト等と調整しながら捻出していかなければならない。また、プロジェクトへのコミットの仕方には個々人によって差異があることから、学生生活の中で、本プロジェクトの優先順位を高く位置付ける受講生とそうでない受講生との間には取り組みの熱量において差異が生まれてくる。ただそれでも、受講生間で丁寧なコミュニケーションを継続していかなければプロジェクトを

進捗させていくことはできない。粘り強さが求められるのである。「自分は頑張っているのに、あの人は頑張っていない」というような不平を自分の内に溜め込んでいたのでは、チームとしてプロジェクトを進捗させていくことはできない。

そのような丁寧なコミュニケーションは、受講生間だけではなく地域住民の皆さんとの協働の際にも同様に大切になってくる。課題発見は、地域の皆様からまずはお話を伺うことから始まる。しかし、受動的にお話を伺っているだけでは課題発見には至らない。伺ったお話をヒントにしながら、まち歩きをおこない、インタビューを繰り返し、さまざまな地域活動への参加等、自分たちの主体的な活動を通して、課題は次第に浮かび上がってくるからだ。地域課題は、目の前のモノのように存在しない。それは発見されるものなのである。地域課題を発見したら、次は課題解決のフェーズにプロジェクトを進めていくことになる。具体的な活動の中身を計画段階から地域の皆様に相談・確認しながらでないと、協働を進めていくことはできない。地域の皆様からすれば常識的なことでも、受講生からすれば何もわかっていないようなことが多々ある。だからこそ、受講生は自ら進んで地域の皆さんと丁寧なコミュニケーションを継続的にこなしていく必要があるのだ。

前述したように、本プロジェクトに限らず、「課題発見×課題解決」型のプロジェクトに取り組むことは、多くの学生からすれば極めて難易度が高く感じられる。そのような難易度とは、以上のような受講生同士のコミュニケーション、地域の皆様とのコミュニケーション、そしてそれらのコミュニケーションを同時に継続させながら、地域社会の流動的な状況の中で、そのような状況に柔軟に適応し、必要があれば計画を修正しながら（順応的に）課題解決のための活動を着実に進捗させていくこと、そのようなプロセスの「複雑さ」に起因しているのである。ただし、そのような「複雑さ」を乗り越えて、「課題発見×課題解決」のプロセスと生み出された成果を地域の皆さんと共有すること、すなわち「発見・解決・共有」のプロセスを地域の皆様と共に経験することにより、自らの「確かな成長」を実感できるようにもなる。そのことが、「地域エンパワメント・大津中央」を履修することの、いわば醍醐味と言うこともできるだろう。

（２）2025年度取り組みの紹介

【前期】2025年度の前期は、本プロジェクトの受講生は当初4名であった。ただし、後期の後半の段階で、やむを得ない理由があったとはいえ、残念なことに1名が履修を中止することになった。また4名のうち2名が3年生（いずれも社会学科）、2名が2年生（現代福祉学科）であった。前期の「課題発見」の段階では、大津市の中心市街地で地域づくりに関わってこられた方々にお話を伺った。

4月25日には、安孫子邦夫氏（大津市中央学区自治連合会 顧問）から、会議用の Web

カメラを使用してオンラインでお話を伺った。安孫子氏は、ここしばらくで、地域活動が急激に脆弱化してきていると指摘された。自治会の加入率は減少しており、地域住民は自治会活動を通して提供するさまざまなサービスを楽しみ消費することはあっても、逆に、自らそのサービスを提供する側になって一緒に汗をかこうと



いう意識は弱くなってきている。特に、コロナ禍以降、そのような傾向がますます強まってきているのではないかということであった。また、中心市街地では、マンションの建設が続き若い家族の転入が増加しているが、マンションの子どもたちが、マンションに隣接する以前からある自治会の行事（地蔵盆）に参加できないようなことが起きている。ちょっとしたアイデアと発想の転換があれば、これまでになかった交流が生まれるはずだと指摘された。地域の伝統を大切にしつつも、その本質を見失わないようにしながら、工夫を積み重ねていくことが必要だとも述べられた。

5月16日には、会議用の Web カメラを使用して岩原勇氣氏（特定非営利活動法人 BRAH=art. (ブラフアート) 理事長）にお話を伺った。地域社会は多様な考え方の人

びとから構成されており、それぞれが自分の幸せを目指しているわけだが、岩原氏は、できればその幸せが、他者の幸せにつながってほしいし、そのためには、一人ひとりの「良さ」がにじみ合うことが大事であると述べられた。そし



て、それらの「良さ」をつなげていく「コネクター役」が必要になるとも述べられた。また、何が本質なのかを見極めて、考え抜いた本質からずれるものは、今、やるべきことではないのだろうと諦めること、そして大きい視野は必要だが、大きな社会問題から地域での活動のあり方を考えないこと、まずは目の前の他者の困難を直視することから始めることが大切であると述べられた。

5月18日には、大津市の中心市街地の「まち歩き」を実施した。伝統的な町家とマンションが混在している様子を確認した。一般的に、若い家族や若者を見かけることがあまりないことに気づいたようであった。この時の気づきが、後期の「課題解決」の出発点となった。



5月23日と30日は、これまでオンラインで伺ってきたお話や自分たちの「まち歩き」をKJ法により整理して理解を深めた。

6月13日には、長年にわたって大津市の中心市街地で活動されてきた雨森鼎氏（大津の町家を考える会 会員）に來学いただき、お話を伺った。町家に加えて、大津の街の歴史、大津の街がどのように発展してきたのかということも含めて、大津が歴史的資源の宝の山であることをお話しくださった。その上で、企業主導によるマンション開発により、町家をはじめとして地域の歴史的資源がどんどん希薄化していくことを非常に心配され



ていた。「まちはそこに暮らす人のもの」であって、企業主導の開発の場ではない。

「まちは人生を楽しむ場」であり、「多様な人が出会う場」であることを強調された。

7月4日には「前期活動共有会」が開催され、他のプロジェクトとの交流により、それぞれのプロジェクトの活動を知りつつ、自分たちのプロジェクトのユニークさを知ることができた。

前期の最後には、これまでのプロジェクトの取り組みを振り返りつつ、後期ではどのような方向性で活動をするのかを共有した。また、街中で活動されている方々のところに出かけてお話を伺わせていただくこともおこなった。そのようなお話のなかから、

「商店街に小さな親子連れが減少している」、「大きなイベント時は人が集まるが、日常的なにぎわいを維持するのが難しい」といったことに気づくことができた。また、そのようなお話を伺うなかで、受講生たちは、大津市のブランディングや商店街の振興に取り組んでおられる栗山誠司氏（ラーニング for アクション in ナカマチ 共同代表）に

出会うことができた。また栗山氏からご支援とアドバイスをいただき、まだこの段階では明確ではなかったが、後期の実習は商店街を中心に活動していくことが共有された。

【後期】前期で一応の方向性が見えてきたはずであったが、後期の実習は波乱含みで始まった。受講生の中で活動の方向性に関してズレが生じてしまったからだ。なんとか持ち直し、再度、方向性を確認した上で、1人の受講生の提案を大切にしつつ、他の2人の受講生が支援して活動を進めていくことになった。その活動が「ナカマチのひみつきち」である。大津の中心市街地には、マンションが続々と建設され、若い親子が多数転入されている。そのような親子でもほっとできる小さな居場所を確保し、絵本を囲んで、親子でゆったり過ごせる時間を提供していくことがこの活動の主目的であった。2021年度に「地域エンパワねっと・大津中央」で実施した「あつまれ！みんなで作る絵本館」という企画では、中央学区のご家庭から多数の絵本をご寄付いただいた。それらの絵本は大学で丁寧に保管していたが、今回の「ナカマチのひみつきち」では、それらの絵本を再活用することができた。

ナカマチ商店街は、丸屋町商店街、菱屋町商店街、長等商店街、以上の3つの商店街で構成されているが、「ナカマチのひみつきち」の活動は、このうちの菱屋町商店街の中にある「ナカマチスタジオ」という施設を利用して実施した。「ナカマチスタジオ」は、栗山氏も参加・参画する「ラーニング for アクション in ナカマチ」が運営しており、「学び」と「行動」をテーマにした地域密着型の多目的コミュニティ施設である。会議、ワークショップ、個人の作業や趣味の集まりなどに利用できるスペースを提供している。また、YouTube チャンネル「ナカマチスタジオチャンネル」を通じた商店街・地域の情報発信や、イベント・講座の開催がおこなわれており、地域の課題解決や新しい挑戦を支援するプラットフォームとしての役割を担っている。「ナカマチのひみつきち」の活動をこの「ナカマチスタジオ」で開催するにあたっては、受講生らが「考えたこと」「やりたいこと」をそのまま実施するのではなく、栗山氏からアドバイスやサポートをいただいた。また、受講生らも丁寧に栗山氏や商店街の関係者と調整をおこなうと同時に、ご支援とご協力をいただくことで初めて実現できることになった。このような丁寧なコミュニケーションを必要とするところに「地域エンパワねっと・大津中央」の特徴がある。また、このようなコミュニケーションは、結果として、受講生自身が自ら成長していくことにもつながっている。

「ナカマチのひみつきち」は、第1回は12月13日に、第2回は1月17日に、第3回は2月28日に開催された。開催時間は、いずれも10時から14時までである。いずれの回も、絵本のコーナーと工作のコーナーの2つのコーナーが設けられた。絵本のコーナーでは幼児が自分で絵本を選んで読むことはもちろん、親子での読み聞かせもおこなわれた。また、受講生たち自身も来場した子どもたちに丁寧に読み聞かせをおこなった。また、工作コーナーでは、紙コップなどを利用して幼児でも少し手伝えばできるような楽しい工

作をおこなえるように工夫した。工作コーナーでは、子どもたちだけでなく、親御さんも夢中になって作っておられることもあった。また、前述した2021年度開催の企画「あつまれ！みんなで作る絵本館」のすべての開催日に参加してくれた小学生が、第3回の際に来場してくださり、幼児たちと一緒に絵本や工作を楽しみつつ、またその幼児たちのお世話もしてくださった。レンタルしたスペースには、柔らかいマットを敷きつめて、幼児が喜んでくれそうな飾り付けもおこなった。そのようにして親子で楽しめる空間を生み出した。このレンタルスペースは、商店街の通りに大きなガラス窓を通して接しており、毎回、多くの方々がこの「ナカマチのひみつきち」の様子を通りから暖かい眼差しで眺めておられた。



第1回目には、同時に、語り部・湖太郎さん（近江怪談クラブ）によって特別紙芝居「滋賀の怪談文学紙芝居」が演じられた。社会共生実習サポートデスクを通して記者クラブへのプレスリリースもおこなった結果、この回は中日新聞の取材があった。第2回目は、社会学部の入試パンフレット製作のための取材、および京都新聞の取材があった。いずれの回も、受講生たちにより Instagram による広報もおこなわれた。

（3）2025 年度の取り組みの成果と課題

後期のスタート時には、受講生たちの間で活動の方向性に関してズレが生じてしまった。日々の受講生間のコミュニケーションについては指導教員として介入することはないが、この時はやや厳しく全員を指導せざるを得なかった。（1）の「取り組みの趣旨・目的」のところで、以下のように述べた。

学外や授業以外で活動する必要があるため、そのための時間を、他の授業、課外活動、アルバイト等と調整しながら捻出していかなければならない。また、プロジェクトへのコミットの仕方には個人によって差異があることから、学生生活の中で、本プロジェクトの優先順位を高く位置付ける受講生とそうでない受講生との間には取り組みの熱量において差異が生まれてくる。ただそれで

も、受講生間で丁寧なコミュニケーションを継続していかなければプロジェクトを進捗させていくことはできない。粘り強さが求められるのである。「自分は頑張っているのに、あの人は頑張っていない」というような不平を自分の内に溜め込んでいたのでは、チームとしてプロジェクトを進捗させていくことはできない。

教員の立場から見た時に、大変残念なことだが、このような受講生間での丁寧なコミュニケーションが、プロジェクトの途中まで不十分だったと言わざるを得ない。しかしながら、後半は、4名のうち3名が「ナカマチのひみつきち」を企画・準備して、後述するように栗山氏からも高い評価をいただくことができた。残り1名はひとりで別のプロジェクトを立ち上げることになった。このプロジェクトも商店街での活動ということもあり、やはり栗山氏にご相談することになったのだが、栗山氏とのコミュニケーション、連絡や相談が不十分で、曖昧な企画を立てるだけになってしまった。本人がさまざまな学内外の企画に関わり本プロジェクトに集中できなかったことが最も大きな問題であったように思う。栗山氏を始めとして地域の皆様にご迷惑をおかけするわけにはいかず、この受講生は、結局、履修を途中で中断することになってしまった。残念なことである。

さて、「ナカマチのひみつきち」に関しては、ご支援くださった栗山氏からは、以下のようなコメントをいただいている。また、SNSへの投稿に書き込みをしてくださっている。

【学生の企画提案について】

(学生さんたちの提案は、) 私たちが見落としがちな視点や、学生さんならではの柔軟な発想が随所に盛り込まれており、大変参考になりました。イベント提案も非常に具体的で、実現可能性のある取り組みばかりだと思います。いただいたアイデアのいくつかは、実際に他団体との連携の中でも活かせそうですので、今後の企画づくりにぜひ反映させていければと考えております。

【第1回目の開催後】

のべ20~30人ほどの来場者を迎えながら、その場その場で工夫されている姿がとても印象的でした。初めてのことばかりで大変だったと思いますが、楽しそうに取り組む様子が微笑ましく、こちらも元気をもらいました。当日は、学生の皆さんが主体的に動き、来場者の状況に応じて柔軟に対応されている姿がとても印象的でした。試行錯誤を重ねながら、学生にとっても地域にとっても意味のある取組として、共に育てていけましたら幸いです。

【第3回目の開催後】

1回目と2回目は私も準備にかなり関わりましたが、3回目の今回はほとんど手を出さず、学生さんたちが主体的に運営しています。当日の進行や声かけ、空

間づくりも回を重ねるごとに安定してきました。さらに嬉しいのは、地域の方から「何か手伝えることある？」といった声が自然にかかり、協力の輪が広がりつつあることです。学生と地域がゆるやかにつながりながら、場が育っていく。こうした形が見えてくると、たとえ学生さんが卒業されたとしても、このコミュニティは続いていくのではないかと感じています。今後の展開が楽しみです。

「ナカマチのひみつきち」の活動については、栗山氏から大変高い評価をいただくことができた。栗山氏からのご指摘は、「大津エンパワねっと」時代から引き継がれてきた「エンパワの精神」が通奏低音のように今でも持続していることを示しているように思う。今年度、「ナカマチのひみつきち」を履修した受講生の中からは、次年度も引き続き履修することを決めた受講生もいる。栗山氏が述べておられるように、さらに「受講生と地域がゆるやかにつながりながら、場が育っていく」ことを期待したいと思う。

(4) 受講生の感想

1年間「社会共生実習（地域エンパワねっと・大津中央）」を履修して

現代福祉学科 2年生 松尾成美

前期・後期の履修を通して、私の中で最も大きく変化したのは、「他者とどのように関わるのか」「支援や実践とは何か」という認識である。これまで私は、人と関わる以上、相手の状況を理解し、適切に関わり、何かしてあげることが望ましいと考えていた。しかし、授業中に配布された資料^{*1}を読み進める中で、その姿勢そのものが、他者の尊厳を損なう可能性を含んでいることに気づかされた。

杉岡先生が大切にされていた「他者の他者性」という考え方は、他者は私が決して完全に理解することのできない存在である、という前提に立つものである。私はこれまで、「相手のために思って」関わる中で、無意識のうちに相手を自分の理解の枠組みに当てはめ、「分かったつもり」になっていたのではないかと思う。そのことが、相手の声や事情を聞く前に結論を出してしまう暴力性につながりうるという点に、強い衝撃を受けた。

この気づきは、現在取り組んでいる「ナカマチのひみつきち」というプロジェクトを捉え直すきっかけにもなった。「ナカマチのひみつきち」は、誰かを直接支援する場でも、交流を目的とした場でもない。来たい人が、来たいときに、来たい形で過ごせることを大切に、話しても話さなくてもよい、関係づくりを強制しない場として運営している。

ナカマチのひみつきちでは、「支援を必要としている人」や「子育て支援を求めている親」といった特定の対象像をあらかじめ設定していない。それは、誰も何らかの形で居場所や人と関わりを求めている一方で、その思いが必ずしも「支援」という言葉や行動と

して表れるとは限らないと考えているからである。子育て中であっても支援を求めている人がある一方で、子育てとは無関係でも、誰かと同じ空間にいることを必要としている人もいる。ナカマチのひみつきちは、そうした多様なあり方を一つの枠に当てはめず、「ただ来てよい場所」として開かれている。

このような考えに至った背景には、活動当初の問題意識の変化がある。はじめは、子育て世代が商店街に足を運ばず、結果として多世代交流が生まれていないことを課題として捉えていた。しかし活動を進める中で、「子育て世代だから関わりを求めている」「交流が不足しているから場が必要なのだ」といった見方そのものが、当事者の多様な思いや距離感をすくい取れていないのではないかと感じるようになった。そこで、あえて対象を制限せず、絵本という要素を中心に捉えることで、結果的に親子が集まりやすくなることも、参加の理由や関わり方を一人ひとりに委ねる場づくりを目指している。

このような場づくりの背景には、地域社会において「地域との関わりは不可欠である」という強い認識が存在していることもある。地域で暮らす以上、誰とも関わらずに生きることは難しく、互いに顔が見える関係の中で支え合うことが前提とされてきた。その一方で、関わりが不可欠であるゆえに、距離を取ることや、関わり方を選ぶことが難しくなり、生きづらさを抱える場面も少なくない。

ナカマチのひみつきちでは、こうした地域の前提を否定するのではなく、「関わらなければならない」と一方向の関係性を緩める試みである。地域との関わりを大切にしつつも、その濃さや形を一人ひとりが選べる余地を残すことで、無理のない関係性を可能にしたいと考えている。相手を理解しきろうとせず、説明を求めすぎず、ただ同じ空間に「いる」ことを許すことは、他者の他者性を尊重する実践でもある。

また、「弱さが生み出すコミュニケーション」という視点も、「ナカマチのひみつきち」の実践を支える重要な考え方である。「ナカマチのひみつきち」では、何かできることや、役に立つことを前提としない。何もしなくても、何も与えられなくてもよい。そのような弱さや不完全さを抱えたまま空間を共有することが、結果として人と人との緩やかなつながりを生み出しているように感じている。

今後、「ナカマチのひみつきち」をさらに発展させていくにあたっては、「支援しようとしすぎないこと」「成果を数値で測ろうとしないこと」に注意していきたい。参加人数や継続性といった分かりやすい指標ではなく、その場が誰かにとって「来てよい場所」であり続けているかどうかを大切にしたい。誰しもの関わりを求める可能性を持ちながらも、その表し方や距離感は一それぞれである。その前提に立ち、理解し合おうとしすぎない距離感を保ちながら、弱さを抱えたままでも存在できる場を、これからも丁寧にひらき続けたい。

*1 高田文英氏(文学部・真宗学科)の講演録「杉岡先生を偲ぶ」(『りゅうこくブックス 今この苦によりそう』138、龍谷大学宗教部)。

社会共生実習 「大津エンパワねっと」

滋賀県大津市に注目し、まちについて学びを深める。その中で見つけた課題を自分たちの取り組みでちょっとよくする活動。

1. まちを知り、発見した課題 3. 企画プロジェクトについて

大津中央学区において、商店街の利用者が少なく、人の流れが生まれにくいことに加え、新設マンションに住む若者世代や子育て世代が地域と関わる機会が不足しているという課題に取り組んだ。



2. 課題に対して出来ることは

6月に実施したまち歩きを通して、道行

く人の少なさや商店街の人通りの少なさを実感したことをきっかけに、課題解決に向けた取り組みを検討した。シニア世代は自治会や回覧板など既存の仕組みによって一定の交流が行われている一方、新設マンションなどに住む若者世代、特に子育て世代は地域との接点が少ないと考えた。そこで、子連れでも気軽に参加でき、多世代が同じ空間を共有できる場をつくることを目的に、ナカマチ商店街にあるナカマチスタジオをお借りし、絵本や紙芝居の読み聞かせイベントを12月に実施した。



「ナカマチのひみつきち」・目的
「子育て世代」のまちへの関わりづくり

・形式

1階 絵本コーナー

2階 ゲストコーナー(紙芝居)

・ご協力

栗山さん

ナカマチ) (ラーニングアクション
新聞記事



4. 学んだこと、今後の課題

第一回のイベントでは、参加した親御さんから「街を出歩くきっかけになった」「ぜひ継続してほしい」といった声をいただき、地域に出る場を求めている人がいることを確認できた。一方で、参加者は家族単位で過ごす場面が多く、交流が十分に生まれなかった。今後は、参加者同士の会話や関わりが自然に生まれるよう、イベントを交流の場として工夫していくことが課題である。



農福連携で地域をつなぐー

「地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて」

担当教員：坂本清彦

(1) 取り組みの趣旨・目的

障がい者の雇用機会拡大と農業の担い手確保を主な目的として普及してきた農福連携事業は、近年、農福連携が障がい者だけでなく高齢者やひきこもり者も含めた多様な人をつなげ、地域づくりの契機としても注目されています。その一方で、農業や福祉関係者以外には、農福連携という言葉自体も広く認知されているとはいえません。

本プロジェクトは、滋賀県栗東市で農福連携を通じて地域社会をつなげてきた障がい者支援組織の事業「おもや」で、障がいを持つ利用者やスタッフとの農作業や地域の朝市への出店など、農業と福祉が交差する多様な活動に参画して、農業や福祉の課題を学び、多様な人々がどう働き、生き、つながっていけるのかを考え、課題解決に向けた小さな実践を目指しました。具体的には、おもやの利用者やスタッフとのコミュニケーションの向上を目指した交流企画などを通じて、受講生が座学と現場を往還しながら複層的に学ぶ実習活動を仕組みました。

(2) 2025年度の取り組みの紹介

本プロジェクトは学期中の毎週金曜日の午前中を主な活動日として、おもやで実習をおこないました。5年目に入った本プロジェクトはおもやの方々にはすでに認知され、温かく受け入れてもらいましたが、昨年度以前からの継続受講生がおらず、新しい受講生は最初から作業を自力で学んでいく必要がありました。

これまでと同様、受講生にはさまざまな作業を経験してもらいました。前期、後期を通じて、受講生たちはトマトの誘引（ひもで主幹を支柱に固定すること）や脇芽とり、ねぎ苗の草引き、種まきから収穫まで種々の圃場作業や、農産物の選別など出荷準備作業をおもやの方々と一緒におこないました。上述の通り継続受講の受講生がいなかったため、前期の最初の頃はコミュニケーションにややごちないこともあったようです。しかしおもやの利用者の方やスタッフの中には積極的に受講生に話しかけてくれる方もおられ、一緒に圃場で活動する中で、作業の説明やたわいもない会話も含めたコミュニケーションを通じ関係性が徐々に構築されていきました。

受講生は、さまざまな農作業を通じて、農業では天候や気温、害虫など人の力ではコントロールできない自然の力に左右されつつ、それを上手く受け入れ、色々な工夫をす

ることが大切であることを認識しました。また「農作業」といっても田畑での作業だけでなく、出荷準備、害虫駆除や除草など、多様な作業があり、静かな環境でひとりで黙々とおこなえる作業もあって、障がいを持つ利用者一人ひとりの特性や能力に応じた作業がおこなえるという観察もありました。



▲トマトの誘引作業をおこなう受講生



▲播種作業をおこなう受講生

また、地域住民との交流を図るため、栗東駅近くの大宝神社が毎月1日に開催する朝市におもやスタッフと利用者の方とともに6月1日と12月1日に参加し、たき火を起してお茶を沸かし参拝に訪れた方々に振る舞いました。受講生は神社に訪れた方々と会話を楽しみ、地域社会に自然に入っていくことができました。受講生が、「焚き火番をする利用者の方の元には多くの方が自然に話しかけに来ており、障がいのある方と地域住民とが打ち解け合って交流する様子に驚き」、朝市が「地域コミュニティの発展だけでなく、『おもや』の活動を地域に広く知ってもらう場にもなっており、地元の農家や福祉施設との連携にもつながっている」ことを学びました。



▲大宝神社の朝市で参拝者にお茶をふるまう受講生

今年度初めての取り組みがいくつかあります。

一つ目は、おもやの昼の休憩時間に利用者、スタッフと受講生の交流企画を実施しました。おもやの利用者の方々が昼食をとりおえた後に、受講生が考案し準備してきたスーパーのチラシに出ている野菜などの値段を当てるゲームをおこないました。はじめは及び腰の利用者の方が多かったものの、シンプルなゲームに徐々にコミュニケーションも熱を帯び楽しく終えることができました。



▲利用者やスタッフの方々とゲームを楽しむ受講生

二つ目は、おもやでとれたサトイモなどを使い、社会共生実習の活動共有会で豚汁をふるまったことです。社会学部が今（2025）年度に移転した深草学舎の調理実習室をお借りし、受講生が野菜の下ごしらえをして豚汁を用意し、活動共有会の参加者にふるまいました。サトイモがとろとろでおいしかったといった感想が寄せられ、受講生もやりがいを感じることができました。



▲活動共有会でふるまう豚汁用のサトイモ（おもや産）の下ごしらえをする受講生

三つ目は、社会学部が移転した深草学舎に利用者やスタッフの方々をお招きして、キャンパスツアーを実施したことです。利用者の方々が普段大学に来る機会はありませんので、学内を回って大学のさまざまな施設を見学してもらいました。受講生からおもやの方々に説明などもおこない、交流を深めました。昼食は、学舎内にある障がい者就労継続支援B型事業所の「café 樹林」でとり、障がいを持つスタッフの方々の働き方などについて話を伺いました。



▲café 樹林の運営等について話を熱心に聞くおもや利用者とスタッフ

実習活動の最後は、2月におもやの第2拠点である「あるきだす」でのみそづくりでした。「あるきだす」は栗東市の金勝地域の古民家をリノベーションし、おもやの方々がこの地域で農作業をおこなう際の拠点・休憩所として使ったり、一般向けのカフェもオープンしたり、地域内外の多様な人たちをつなぐ場所として利用されています。ここで大豆を使い、みそづくり経験のあるスタッフの方から作り方を教えてもらいながらみそを仕込みました。受講生にもご用意いただいた小さめのツボにみその材料を詰め、自宅に持ち帰って発酵させ、自分で出来上がったみそを試してもらうことになりました。



▲おもや第2拠点「あるきだす」でのみそづくり作業

(3) 2025年度の取り組みの成果と課題

基本的に少数の新規受講生のみで活動した2025年度は、昨年度までの活動の狙いを修正しました。昨年度までのマルシェのような企画イベントの立案・実施ではなく、小さな日常の活動を通じておもやの方々との交流を深めることが活動の中心となりました。普段の圃場での共同作業を通じた受講生と利用者の方々との会話に加えて、ゲームでの交流や深草キャンパスツアーなどをおこなった結果、利用者の方と受講生とのコミュニケーションが深まっていったことは、2025年度の成果と言えます。

学生自身が表明した学びとしては、障害の特性を十分に理解した上でのコミュニケーションのとり方、関係性の構築の重要性や、個々の優れた特性を顧みず障がい者をひとくりに「障害者」とし「害」ととらえる視点の問題点、多様な作業工程がある農業ではさまざまな特性をもつ障がい者が働ける可能性があることなど、障がい者福祉や農業に関する気づきや理解の深化があげられます。

2025年度は少数の新規受講者での活動が中心でしたが、おもやの方々は受講生の存在や受講生との作業、交流を「自然なこと」として捉える雰囲気があり、受入先と実習と

の信頼関係が強まったことも継続してきた実習の成果と考えられます。

一方で、農福連携に関する予備知識の学修が十分とは言えなかったことが一つの課題でした。受講生のスケジュール、意向、特性等が多様化する中で、実習の目的や活動設定の難しさが課題として挙げられます。また、継続受講者がいないと、マルシェなど作業負担の大きい活動を学生主体で企画し運営することが難しくなることも課題だと考えられます。

最後に、シラバスの記載事項と実際の実習運営との間に齟齬があり、本プロジェクトの受講生や実際には受講しなかった他の学生に不利益が生じ得たことは問題でした。受講生のスケジュールに柔軟に応じて実習活動を認めたことが背景でしたが、それが他の受講生にとって不公平感を招いたという事案です。そうしたことのないよう、実習運営における一貫性を確保する必要があります。

(4) 受講生の感想

現代福祉学科 4年生 上田愛里

障害の特性を十分に理解した上で関係を築くことの難しさがあげられる。日常的なやり取りの中で、何気ない言動が相手にどのように受け取られるのかを常に考えた。また、特性への理解が不十分なまま関わることで、コミュニケーションが円滑に進まなくなる可能性があることも課題であった。

そのため、作業時間に限らず、休憩時間も大切な関わりの機会であると捉え、利用者の方々とのコミュニケーションを継続的におこなった。日常的な会話や何気ないやり取りを通して、一人ひとりの性格や興味関心、障がいの特性を理解することを意識した。また、利用者の方の発言や行動に対して一方的に判断するのではなく、その背景にある特性や気持ちを考えながら関わるよう努めた。さらに、相手の反応を観察しつつ、言葉選びや声のかけ方、距離感を調整することで、安心して関われる関係づくりを目指した。こうした関わりを積み重ねることで、利用者の方が自分の思いを表現しやすい環境づくりにつながるよう意識して取り組んだ。

結果、「障がい」を「害」として線引きしているのは、理解のない健常者側だと気づいた。実習中、最初はコミュニケーションが難しいと感じた利用者の方がいたが、それは障がいによるものではなく、ただ人見知りであったことに気づいた。相手のペースに合わせて距離感を模索し、話し方を工夫していくと、自然と会話が生まれた。障がいがあることを理由に壁を作っていたのは、むしろ私たちであったと反省した。利用者の方々は農業未経験の私たちを仲間として受け入れ、丁寧に作業を教えてくれた。価値観の異なる相手を理解することは簡単なことではないが、「障がい」という言葉だけで相手を判断し、関わりを諦めることは避けたいと強く思った。

(5) 2025 年度活動報告会の発表ポスター

農福連携で地域をつなぐ 地域で誰もがいきいきと暮らせる共生社会に向けて

1. 農福連携とは何か

『障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組』
『障害者等の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保にもつながっている。』(引用元: <https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/index.html>)

2. 実習の目的

- ① 農業と福祉が結びつく現場を実際に体験し、障がい者等が農業分野で働くことの意義や、一人ひとりに合った働き方について理解を深めるため。
- ② 支援する側・される側という立場を越え、共に働く関係性を体感することで、農福連携の持つ可能性を実感するため。
- ③ 地域が抱える課題を身近なものとして捉え、社会との関わり方を考えるきっかけにするため。



3. 活動拠点について



おもや(2011～)

農業を中心とした障がい者向け就労支援事業(就労継続支援B型)。滋賀県栗東市霊仙寺を拠点とし、複数の畑を所有している。



おもやキッチン(2015～)

就労支援事業の一環として開始された飲食店。「おもや」からほど近い場所に店舗を構える。店内で使用される野菜や果物は、「おもや」の畑で収穫されたものが多く、店頭には、収穫された野菜や、加工場で作られた焼き菓子等も販売しており、利用者へ「おもや」の取り組みを発信している。



あるきだす(2023～)

障がい者就労支援と地域交流を目的とした、古民家を活用した「おもや」の第2拠点。滋賀県栗東市成谷にあり、近くの畑で作業をする利用者さんの休憩所にも使用される。決まった曜日に、喫茶店のマスターがコーヒーを淹れに来訪したり、地域の方がワークショップを開催したりしており、入り口近くには、地域の広報誌が並べられている。



おもやでは、

地域の方々との繋がりを築くこと

を大事にしている！

4. 1年間の活動記録

○農作業

年間の活動は、前期にはトマト誘引やバターナッツ収穫など利用者さんが事前に植え、それが育ったものの収穫、黒豆の種まきや小豆まきなど実習生である私達が食物が育つ最初の段階を担うような活動があった。後期には前期で植え、育ったものの収穫、次の年に向けて新しいものを植える作業をした。

○大宝神社朝市

栗東市にある大宝神社で、毎月1日に開催する月次祭(つきなみさい)にあわせて「朝市」が開催される。今年度は2回参加した。おもやさんの商品等の販売、たき火で沸かしたお茶を参拝者にふるまうなどした。朝市に来られた方に「農福連携」の取り組みを知ってもらおうきっかけになって嬉しいと感じている。地元住民との交流も深めることができ、地域社会の輪を広げることができたと感じている。

○石部でのさつまいも収穫

10月17日、湖南市石部の畑でさつまいもの収穫を行った。本格的な芋掘りを体験する機会は少なからずかなり力がある作業だという風に感じた。商品となる芋を傷つけないようにするために慎重にする事も意識しながら作業を行った。一人では大変に思われる作業だったが役割分担をして全員で力を合わせて行うことができ、団結力と達成感が得られた時間であった。

○活動共有会での豚汁作りとアンケート結果

11月14日、後期の社会共生実習活動共有会にて、実習生や教職員の皆さんに豚汁を振る舞った。「おもや」で育てた人参と里芋を購入し、他の食材と混ぜて調理した。自分たちで、種まきの段階から始め、収穫・調理まで実践できたのは初めての体験だった。また、皆さんから頂いたアンケートには、「里芋がホクホクしていた」「野菜の甘みを感じられた」といった好評な意見が多く寄せられていた。豚汁作りを通して、本実習に参加していない方々へ、実際に「おもや」の野菜を食べて頂いた上、ポジティブな印象を与えることができたので、やりがいを感じられた。

○キャンパスツアー

12月12日、おもや作業所のスタッフ、利用者の方数名を龍谷大学深草キャンパスに招き、キャンパスツアーを行った。先生と私達が中心となり龍谷大生気分を味わってもらえるよう、話をしながらキャンパス内を探索した。普段、私達もキャンパス内を意識して眺めながら歩く機会は少ないためじっくり眺める機会ができ龍谷大学の校舎の綺麗さや様々な仕組みを改めて知ることができた。「大学」の敷地に足を踏み入れることが初めての利用者さんもおられて、キャンパスの広大さや、コンビニやスターバックスコーヒー、ATMなどが入っていること、斬新な形の学舎や居心地の良い空間にも驚かされていた。



5. 学んだこと

- ・障がいを「害」と捉えているのは、健常者側であり、私たちが壁を隔ててしまっていることと、それが、農業という共同作業を通じて仲間意識を持つようになり気付くことができた。
- ・農業には、力仕事だけではなく、屋内でできる作業や個人で黙々とできる作業まで色々な作業工程があり、さまざまな特性を持つ利用者のニーズに合わせて働くことが可能である。例えば、数mmしか生えていない雑草の除草作業を担当した時、単純ではあるものの、幾つもの畝を全て見るとなると果てしなく感じられたが、利用者さんは、文句も言わず丁寧に作業を進められていたことがあげられる。
- ・価値観やライフスタイル、考え方も異なる人とコミュニケーションをとることの難しさを痛感し、同時に、普段の自分がいかに似た価値観を持つ人とは関わってこなかったのかに気付くことができた。
- ・利用者さんには頭の回転が早い、記憶能力が優れている人など一人ひとりに優れた特徴があって障がいの有無は能力の有無を決めるものではないと感じた。

担当教員：坂本清彦

チームメンバー：上田愛里 松井涼

お寺の可能性を引き出そう！

— 社会におけるお寺の役割を考える —

担当教員：猪瀬優理・古莊匡義

(1) 取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトでは、お寺を中心に地域社会で展開されるさまざまな活動に参画しながら、現代社会におけるお寺の可能性について考えることを目指した。ここで言う「さまざまな活動」には、お寺が主催する活動だけでなく、仏教の信仰をもつわけではない個人や団体によるお寺を拠点にした活動や、お寺と協働して実施する活動も含まれる。

近年の少子高齢化や過疎化の状況の中で、檀家との関係だけでは維持できないお寺が増えており、葬儀の簡略化などを受けて、仏教の存在意義が問われる状況になっている。また、お寺は全国にコンビニよりもたくさんあるが、必ずしも檀家以外に門戸を開いているわけではなく、とりわけ若者からは入りづらい場所、縁遠い場所として捉えられている。

このような状況を受けて、檀家に限らず、地域とのつながりを重視し、こども食堂や高齢者向けのサロンなど、地域のつながりや居場所を作るためのさまざまな社会活動を実施するお寺が近年増えてきている。また、地域住民をはじめ、お寺や仏教と深いつながりをもたない人も含めた多くの人々に門戸を開き、さまざまな方や団体にお寺を活動拠点として提供する事例も少なくない。お寺は、仏教の信仰をもつ人にとっても、もたない人にとっても社会活動の拠点となる可能性を秘めている。

そこで、本プロジェクトでは、地域社会とつながりを深めているお寺の活動に参画することを通して、現代社会におけるお寺の可能性を体験的に学び、さらに実習生自身が調査や企画を実施することを通してお寺の可能性を引き出すことを目指した。

本プロジェクトは大きく3つの期間に分けられる。①前期の前半は、担当教員とつながりのあるお寺を訪れたり、僧侶にお話を伺ったりすることで、受講生にお寺の現在と可能性を体験的に知ってもらう「教員企画の実習」。②前期の後半は、(後期に受講生自身が企画や調査を実施する練習として) 受講生がお寺に関連する活動を調べ、活動の関係者に話を聞きに行く「学生企画」の実習。そして、③後期は受講生が連携先寺院を決定し、活動内容を寺院と協働しながら計画・準備し、実施する「学生企画」の実習である。

なお、金曜3講時の学内実習の時間には、学外実習の事前・事後学習や企画の準備を実施するとともに、書籍を講読した。前期は大谷栄一編『ともに生きる仏教——お寺の

社会活動最前線』(ちくま新書、2019年)を講読しながら、お寺の社会活動の実際について学び、議論した。後期は、お寺に限らず、現代の日本社会において諸宗教がどのような意義や可能性をもつかを考えるため、堀江宗正責任編集『現代日本の宗教事情〈国内編Ⅰ〉(いま宗教に向きあう 1)』(岩波書店、2018年)および、西村明責任編集『隠される宗教、顕れる宗教〈国内編Ⅱ〉(いま宗教に向きあう 2)』(岩波書店、2018年)の2冊を講読した。

以下、3つの時期に分けて実習の概要を記す。

【①前期 教員企画】前期の前半は、教員の企画による実習で、西方寺・本願寺・一念寺を訪問した。受講生はお寺を見学し、住職などのお話を伺ったり、お寺の活動に参加したりすることで、地域におけるお寺の役割や可能性について体験的、主体的に学んだ。また、斎藤英明氏(浄土真宗本願寺派 教化部 部長)および河村英昌氏(神社仏閣オンライン 代表)よりお話を伺い、現代社会におけるお寺のあり方や可能性について広く深く学ぶことができた。

【②前期 学生企画】そして、前期の後半には、後期に受講生自身が企画や調査を実施する練習として、受講生がグループに分かれて学外実習の企画を立案し、法善寺・佛現寺・ファミカ(お寺も会場にして学習支援活動を実施)を訪問し、多くの学びを得た。

【③後期 学生企画】夏休みに受講生が各自で検討した企画を持ち寄って、後期に寺院と協働して実施する実習の企画を検討した。各受講生が多様な関心をもっており(寺院の運営や継承、観光と寺院、寺院と防災、居場所としての寺院、など)、活動するグループについてなかなか検討が進まなかったが、浄土宗大本山清浄華院で開催される LOTUS WEEKEND 2025 の場をお借りして、受講生の多様な関心を実現できるような企画を実施する方向で進めることとなった。とはいえ、LOTUS WEEKEND 2025 のテーマである「いのち・しあわせ・平和 ―未来へのメッセージ―」と受講生のやりたいこととをつなぐことは難しく、なかなか企画の検討が進まなかった。最終的に「防災」をテーマにしたワークショップ(新聞紙スリッパ作り、ホイッスルのデコレーション)やクイズの企画を実施することで、来場者と受講生、あるいは来場者同士が交流するような場を作ることを目指した。2日間(2025年11月15日、16日)のイベントで57人の方に来場いただいた。来場者数としては必ずしも多くないものの、受講生は来場者とゆっくりと交流することができ、話が盛り上がる場面もしばしば見られた。受講生にとっても、お寺がさまざまなつながりを作る可能性を体感できる機会となった。

前期・後期の実習を踏まえて、2026年1月9日の社会共生実習活動報告会にて、口頭発表・ポスター発表を実施し、活動内容や得られた知見を報告した。

また、前期・後期の実習の成果は、noteの記事（右のQRコードから閲覧可能）としてまとめ、広く公開した。（担当教員 古荘匡義）



（２）2025年度取り組みの紹介

【①前期 教員企画】

5月10日に西方寺で開催された「花地藏まつり」に受講生6名が参加した。学生たちは駐車場警備と抽選会のくじ作りのスタッフとしても活動させていただいた。

また、本実習のnote記事を作成する担当となっていた受講生を中心に、ステージでのピアノ演奏や出店している店舗の店主の方など、お寺にかかわっている方々へのインタビューもおこなうことができた。抽選会終了後、会場の片付けも手伝い、帰りのバスの時刻に合わせて解散した。



5月17日午前、浄土真宗本願寺派の本山である本願寺に受講生8名が訪問した。斎藤英明氏（浄土真宗本願寺派 教化部 部長）より「お寺の可能性—社会におけるお寺の役割」というタイトルのもとご講演をいただいた。本願寺派を中心にお寺が社会に果たしてきた役割と果たすべき役割との乖離について、また、お寺が社会においておかれている現状について、受講生にとっても広い視点を得る貴重なお話をいただいた。

その後、畑中阿難氏（浄土真宗本願寺派 教化部）の案内により阿弥陀堂・御影堂をお参りし、国宝の書院・唐門・飛雲閣についてご説明いただき、本願寺の持つ宗教性・エンターテインメント性について学んだ。



5月17日午後、本願寺にもほど近い一念寺に受講生5名が訪問した。谷治曉雲氏（一念寺 住職）より、一念寺での取り組みやその背景にあるお考えについて多くの資料をも

とにご説明いただいた。お寺が地域社会において果たしうる幅広い働き、またその可能性について、実際に取り組んでおられる方にその現場でお話を伺うことから多くの示唆を得た。特に、一念寺が地域のハブとしての役割を果たしていくことを意識して活動を展開されている点に受講生たちは多くの学びを得た。



5月23日には、河村英昌氏（神社仏閣オンライン 代表）より、「社会とつながることで広がる可能性—そして、学生の頃にぜひおすすめな生き方」をテーマに、大学生活また今後の人生にとって多くの示唆がある大変充実したお話を伺った。河村氏は、会社を起業・運営されているだけでなく、浄土宗大光寺の副住職でもあり、会社員でもあるなど、多角的に多方面で活躍されている。受講生たちは、その実践から「お寺の可能性は無限大」であるとの実感とその意義を改めて学んだ。また、「いろんな経験をする事で繋がりが増える。それはいつかとても役に立つ。皆さんもいろんな経験をして色々な人と出会って自分なりの掛け算を増やしていきましょう」とのメッセージは今後の大学生活や人生についても視野を広げる機会となった。（担当教員 猪瀬優理）



【②前期 学生企画】

法善寺（観光班：泉原夕斗・立石優太・馬万欣）

私たちのグループは、2025年8月に大阪・ミナミにある法善寺を訪れた。法善寺は法善寺横丁に位置しており、繁華街にあることから観光客の多いお寺である。私たちは、自分たちでアポイントを取り主体的に行動することができた。訪問時には、副住職の方からお話を伺い、仏教の伝統を守りながら観光とどのように両立しているのかについて学ぶことができた。たとえば、水掛不動尊への参拝作法を地域の方々が参拝者に教えるなど、地域の信仰を大切にしつつ観光客にも開かれた形で運営している点などを理解す

ることができた。また、観光地に立地するお寺ならではの騒音やマナー違反などで静寂を保てないなどへの課題や工夫についても知ることができた。(現代福祉学科 泉原夕斗)



佛現寺 (まちづくり班：北山柚樹・西河直人・下村賢人)

まちづくり班3名は、7月下旬に京都市中京区にある佛現寺を訪問し、油小路和貴氏(佛現寺 副住職)へのインタビューを実施し、同日佛現寺で開催された日本酒のイベント「てらのみ」に参加した。佛現寺では、さまざまな人の人生においてとまり木のようなお寺でありたいという思いから、「とまり木プロジェクト」と題し、毎月さまざまな企画を実施している。今回参加した「てらのみ」も「とまり木プロジェクト」の企画のひとつであり、誰でも気兼ねなく人とつながることができる人気の企画となっている。油小路氏は、「みなさんにお寺や仏教に触れてもらうことで、何かひとつを持って帰っていただけるきっかけ作りになれば」と話していた。

「てらのみ」は本堂が満席になるほど多くの参加者でにぎわい、幅広い世代の方々が楽しい時間を過ごしていた。中には「てらのみ」がきっかけで仲良くなったと話す方もおり、ご縁づくりの場としてお寺が活きていることを実感した。(社会学科 西河直人)



NPO 法人ファミカ 現代版寺子屋シープハウス (こども班：中村静華・奥田真帆・西田絢音)

こども班は、NPO 法人ファミカが主催する「現代版寺子屋シープハウス」を実習先に選んだ。NPO 法人ファミカは、「幼児から高齢者に対し、第三の居場所作りを主とする社会福祉に関する事業を行い、誰一人孤立させない地域社会を実現し、つながり支え合えるまちづくりに寄与すること」を目的とした組織で、大阪府高槻市を拠点に活動して

いる。

「現代版寺子屋シーブハウス」は、実際にお寺の本堂でも実施している学習支援プログラムで、毎回、大学生が先生として子どもたちの学習をサポートしている。加えて、子どもたちが抱えている悩み事を仲間や大人に相談できる場所にもなっている。前期の現場実習および講演会を通して、お寺が地域住民の交流の場として機能していること、またお寺が有する広い空間には多様な活用の可能性があることを学んだ。そこで、「現代版寺子屋シーブハウス」に参画し、お寺の持つ機能や資源が具体的にどのように活用されているのかについて調査した。さらに、関係者だけでなく参加者や学生ボランティアへの聞き取りを通じて、お寺での実施だからこそ生まれる魅力は何かを検討した。(コミュニティマネジメント学科 中村静華)

【③後期 学生企画】

清浄華院「LOTUS WEEKEND 2025」防災ワークショップ

受講生一同は、清浄華院にて開催された「LOTUS WEEKEND 2025」において、防災を主題としたワークショップ運営に携わった。「LOTUS WEEKEND 2025」は、寺院を地域に開き、文化体験や学びの機会を提供する地域交流型イベントである。

本取り組みでは、防災意識の向上を目的として、新聞紙を用いた簡易スリッパ制作や、防災・防犯を意識したホイッスル作りなどの体験型企画を実施した。受講生は、準備補助、参加者対応、活動趣旨の説明をおこない、安全面に配慮しながら企画を運営した。

当日は、子どもから高齢者まで幅広い世代が参加し、体験を通して防災への関心を高めるとともに、世代間交流が生まれる機会となった。本活動を通して、寺院が地域社会における交流と学習の拠点として機能している実態を確認することができた。(現代福祉学科 山本蒼一郎)



(3) 2025年度の取り組みの成果と課題

【②前期 学生企画】

法善寺

夏休み期間には、お寺の「観光」の観点に関心のある受講生で、大阪・ミナミの繁華

街に位置する浄土宗・天龍山法善寺を訪問した。法善寺は「水掛け不動尊」を中心に戦災から復興し、現在は観光客が多く訪れる一方で、地域住民が参拝方法を伝えたり見回りを実施したりするなど、地域と観光客の関わりによって支えられていることがわかった。こうした人々の関係性の中で、観光と受け継がれてきた信仰が自然に共存する空間が形成されており、副住職が語られていた「自利利他」の精神は、現代社会において他者を思いやり立ち止まることの大切さを示しているように感じることができた。(現代福祉学科 立石優太)

佛現寺

佛現寺での取り組み成果として、多くのお寺は資本主義社会で存続していくためには営利活動によって運営資金を確保しなければならず、その点では油小路氏が語られていた「お釈迦様は社会課題（例：四苦八苦を筆頭とした“苦しみ”など）への解決策として仏教を起こしたビジネスマンである」という考え方は新たな視点として大きな学びとなった。現代のお寺は時に「坊主丸儲け」と評されることもある。油小路氏も述べていたが、重要なのはビジネスを通して得た資金や資源をどのように活用し、社会へ還元していく中でお寺の価値を現代社会に対して提唱していくべきであるか、という点だと考えられる。

佛現寺では、前述したお寺とビジネスに関係した活動のひとつとして「てらのみ」を実施している。お寺の抱える課題は所在地やお寺自体の規模によって異なる。「てらのみ」も地域や社会に対してお寺や仏教の存在をアピールしつつ、地域交流の場となることを一つの目的とした活動事例であるといえるだろう。(社会学科 北山柚樹)

NPO 法人ファミカ 現代版寺子屋シープハウス

取り組みの成果としてお寺が子どもの居場所として活躍していること、またお寺のネットワークが地域福祉に役立っていることが分かった。

お寺は古くから地域住民の居場所であったことから今回の「現代版寺子屋シープハウス」の活動に繋がっている。実際に本堂の広さを活かして、皆で机を囲んで勉強したり、体を動かして走り回ったりしていた。

また、子どもを預ける保護者の方からもお寺の安心感や古くからの認知があり信頼できるというお声もあったようだ。このことから古くから地域に根ざしたお寺のネットワークを活かした活動であることが分かる。

しかし、現状をどのように維持していくかが課題である。支援してくれている団体はあるが、もし廃寺した際に「現代版寺子屋シープハウス」を開催できない、もしくは開催できるがお寺のネットワークを活かせない、という事態が起きるのではないかと懸念する。

また、今回は「現代版寺子屋シープハウス」のインタビューのみで、活動に参画でき

ずに終わってしまった。実際に「現代版寺子屋シーブハウス」の活動に携わることができればお寺と居場所の課題などももう少し鮮明になるのではないかと考えた。(現代福祉学科 奥田真帆)

【③後期 学生企画】

清浄華院「LOTUS WEEKEND 2025」防災ワークショップ

受講生一同で、清浄華院において、防災をテーマとしたワークショップの企画運営に参加した。新聞紙を用いた簡易スリッパ作りやホイッスル作りの補助、参加者への説明や声かけを担当し、体験を通じて防災意識を高める取り組みを実施した。

その結果、参加者同士の交流が自然に生まれ、防災学習が地域コミュニティ形成にもつながることを確認できた。また、寺院は人々が気軽に集い、対話を通して地域のつながりを深めていく場としての役割を担いようことを実感した。(現代福祉学科 馬万欣)

(4-1) 受講生の感想

社会学科 3年生 西河直人

1. 後期に携わった活動の概要

後期は、京都市上京区にある清浄華院で年1回開催されているイベント「LOTUS WEEKEND 2025」への企画出店を実施した。今年度は「防災」をテーマに、災害用ホイッスルのデコレーション・新聞紙を使った簡易スリッパづくり等のブースを出店した。本企画のテーマである防災は、私が後期に取り組みたいこととして挙げていた大きなテーマで、限られた予算・準備期間の中で、どのような企画を実施するかを話し合った。また企画内容を具体的に決めてからは、買い出しや試作品の製作をおこない、開催日までに下村賢人さん(受講生)を中心に材料などの選考をおこなった。開催当日、私は2日目だけの参加となったが、店番とブース紹介・接客といったブース運営をおこない、少ない人数ではあったが上手く回すことができた。また、このイベントのメインステージでは、佐合井マリ子氏(シンガーソングライター)の司会でさまざまなアーティストが音楽を披露していたが、プログラムの合間に、山本蒼一郎さん(受講生)と私は佐合井氏とトークしながら私たちのブースの紹介をおこなった。

「LOTUS WEEKEND 2025」への企画出店は防災をテーマとしているが、あくまで防災はご縁をつくる上でのトークテーマに過ぎない。もちろん防災の専攻ではないこともあるが、本プロジェクトの最終目標である「お寺の可能性を考える」ことが本実習の目的である。前期に学んだお寺が持つ役割のひとつであるご縁づくりを本当に住民や一般の人が求めているのかどうかについても個人的に課題として設定した。

2. 活動の成果の概要

私は2日目のみ参加したが、2日目は1日目よりも多くの方に来ていただいたとのことだった。当日はホイッスルのデコレーションやスリッパづくりの傍ら、参加者とお寺や防災についてコミュニケーションをとり、ご縁をつくることができた。特に、マルシェとして出店していた泉本氏（天然飴細工 辰友堂）とは、辰友堂の出店ブースでもお話しすることができ、お寺や飴細工界が直面する課題について少し語り合うことができた。接客業のアルバイトをしている経験を活かして、多くの方とコミュニケーションによるご縁づくりをすることができた。

社会共生実習活動報告会で小須賀智氏（龍谷大学附属 平安高等学校 教諭）がおっしゃっていたように、文献調査だけでは分からない現場での情報—なぜお寺に来るのか、お寺とはどんな存在か—といった人それぞれの想いを聴くことができたことは、今回の「LOTUS WEEKEND 2025」に出店したことによる大きな成果だと私は思う。

3. 活動のなかで直面した困難や葛藤

防災に関する企画・取り組みに挑戦したいという発表から「お寺×防災」企画が始まったが、当初私は「防災に関するカルタやすごろくを作り、景品として缶詰やアルファ米といった非常食を渡す」という企画を考えていた。しかし、時間と予算・また防災に関する知識の無さといった関係上、想定よりもかなり簡易な企画に変わってしまい、企画立案者として「本当にこのまま企画が進んでしまってよいのだろうか」、「本当にこの企画で来場者があるのか」という問いが長い間頭の中にあった。

解決する決め手となったのは、初心に戻ることであった。集客のことばかりを考えていたため、この実習の本来の目的がおろそかになっていた。ご縁づくりを通して「お寺の可能性」について考えることで、来場者とコミュニケーションをとることに重きをおいた企画へシフトすることができた。

4. 活動を通して得た自身の変化

1年間このプロジェクトで活動する中で、主体性が身についたと感じている。社会共生実習を昨年度も受講していた経験を生かしながら、成果報告会のポスター作成や企画立案などに積極的に取り組み、リードすることができたのではないかと思う。昨年度に受講していた際には、あまり社会共生実習について知らなかったこともあり、やや受け身であることが多かったが、昨年度の実習から、できるか分からない・苦手なことであってもまず行動することの大切さを学んだため、今年度の実習を進めるにあたって活かすことができたのではないかと思う。

5. 活動によって実習先や地域にもたらした変化や影響

昨年度に受講していたプロジェクトと違い、目に見える成果が残りにくいプロジェクト

トではあるが、一つは実習先のお寺さんに、私たちのような若者もお寺をよりよくしよう・お寺の活動を広めようとしていることを知っていただいたことではないかと思う。佛現寺でのインタビューの際も、そもそも興味をもってもらったこと自体を喜んでいただいたので、これまでに連携したことのないお寺ともっと交流を広げることで、よりお寺と私たちのような若者との共同企画をするきっかけとなるのではないかと考える。

もう一つが、活動報告会で平安高校の生徒さんに実習の大切さを知ってもらうことが少しでも影響を与えたのではないかと思う。昨年受講した際も、実習を受講する受講生が少ないと感じた。実習は実際に現地に行って活動するため難易度が高いように思われるが、やはり座学だけでは現実社会に埋まっている課題を掘り起こすことはできないと思う。現地で活動したからこそ分かる課題や現状を、そして実習の大切さを平安高校の生徒さんたちにお伝えできたのではないかと思う。

6. 現代社会におけるお寺の可能性

現代社会において、お寺は宗教的な施設であるだけでなく、人と人をつなぐ結節点だと私は考える。前期に行った西方寺や一念寺での実習から、地域コミュニティの希薄化が至るところで発生している現状が浮き彫りになった。その一方で西方寺や清浄華院でのイベント時には近隣住民を中心に賑わっている。このことから、お寺は信仰の有無にかかわらず気軽に入ることができる、宗教施設としては特殊な場所だといえるのではないだろうか。気軽に入ることができるからこそ、地域コミュニティを活発にさせる結節点としての可能性を秘めていると私は思う。

(4-2) 受講生の感想

コミュニティマネジメント学科 4年生 中村静華

1. 自分が後期に携わった活動の概要

前期には、河村英昌氏による講義を受講し、住職不足や檀信徒の高齢化といった課題を抱えるお寺にも可能性があり、お寺ならではの資源を生かしたさまざまな取り組みが実施されていることを学んだ。また、西方寺でおこなわれた花地藏まつりでは、本堂での演奏会や境内のストリートピアノを通じて、人々が集い、つながっていく様子に触れ、お寺が仏事や法要の場にとどまらず、地域とつながる場であることを実感した。

こうした学びに加え、他の授業で「お寺の福祉活動」として紹介された「おてらおやつクラブ」をきっかけに、子ども食堂や寺子屋など、子どもを対象とした活動にも関心を持つようになった。こうした関心から、その後、前期末には授業計画の一環として、受講生がそれぞれの関心に基づき、活動をおこなっているお寺や、お寺を会場として実施されているイベントを訪問し、NPO 法人ファミカが寺院の本堂を借りて実施している

「現代版寺子屋シープハウス」を実習先として選んだ。なお、この活動は前期の授業計画として位置づけられていたが、前期中は日程の都合により十分に取り組むことができなかつたため、後期も継続しておこなうこととした。

しかし後期においても、大学の授業時間割の都合により「現代版寺子屋シープハウス」の実施日に現地を訪問することができなかつた。そこで、ファミカのホームページに掲載されている情報をもとに、活動の概要やお寺の本堂が会場となった経緯について整理し、実際に見学をおこなった受講生と情報を共有した。さらに、私はボランティアとして参加している大和大学の学生に電話で聞き取り調査をおこない、活動の内容や運営の実際について理解を深めた。

後期には、受講生全体で、清浄華院において開催された「LOTUS WEEKEND 2025」に、防災にちなんだワークショップを出店した。本ワークショップは、清浄華院が掲げる「いのち・しあわせ・平和—未来へのメッセージ」というテーマに沿い、避難場所ともなり得るお寺という場を生かして防災への関心を高めるとともに、命の大切さを改めて感じてもらうことを目的として実施した。内容は、新聞紙でスリッパを作る活動や、非常時に役立つホイッスルのデコレーションなど、小さな子どもでも楽しみながら参加できるものとした。また、受講生が来場者と会話を交えながら進めることで自然な交流が生まれると考え、ワークショップ形式とした。

ワークショップの会場として屋内の和室を提供していただいたため、部屋の一角に、来場者がほっと一息つける休憩スペースを設けた。その空間を活用し、休憩中にも防災について関心を持ってもらえるよう、目を通しやすい防災クイズの作成を私が担当した。

2. 活動の成果の概要

まず、「現代版寺子屋シープハウス」については、電話での聞き取り調査を担当した。電話での聞き取り調査は今回が初めてであったが、事前に質問項目を準備し、相手の方の返答に応じて話を深めていくことで、インターネットでの事前調査だけでは分からなかつた活動の内容や考え方について知ることができた。特に、活動の目的や実際の取り組みについて具体的に聞き取ることができた点は、大きな成果であった。一方で、聞き取りの過程では、グループ内での情報共有が不十分だったために、活動内容について誤った理解をしたまま質問してしまう場面もあった。このことから、事前に受講生の間で情報を整理し、共通認識を持つことの重要性を学んだ。

次に、「LOTUS WEEKEND 2025」では、2日間開催のうち初日の午前中に参加し、防災クイズの担当を務めた。来場者に楽しみながら参加してもらえるよう、クイズの内容や文字の大きさ、レイアウトを工夫した。また、ワークショップや来場者への声かけを通して、多くの来場者やイベント関係者と会話をすることができ、「新しいご縁を生み出す場」をつくるという目的は達成できたと感じている。その一方で、掲示物の見せ方や

案内の工夫については改善の余地があり、会場全体を意識した準備の大切さを実感した。今回の経験を通して、事前準備だけでなく、来場者の視点に立って考えることが求められることを学んだ。

3. 活動のなかで直面した困難や葛藤、そしてそれらをどのように解決したか

「LOTUS WEEKEND 2025」で準備を担当した防災クイズについては、当初、平和を願うメッセージボードの作成を検討していた。ハートや丸の形に切ったカードを机に置き、来場者に自由にメッセージを書いてもらう形式を想定していたが、具体的なお題を設定できず、企画が行き詰まってしまった。また、イベント終了後にメッセージボードが処分されてしまう可能性があることから、最終的にはメッセージボードの企画を取りやめることとした。

メッセージボードの案を見送ることにしたもう1つの理由に、「LOTUS WEEKEND 2025」には「平和」というテーマが掲げられていたものの、防災ワークショップの目的や内容と、平和を願うメッセージボード企画との間に明確なつながりを見いだすことができなかつたことが挙げられる。防災ワークショップを通して、来場者に防災について知ってほしいのか、平和について考えてほしいのかといった点が整理できておらず、伝えたい内容が曖昧になっていることに気づいた。この経験を通して、イベント全体のテーマに沿うことは重要である一方で、ワークショップとしての意義や目的を明確にすることが必要であると感じた。

4. 活動を通して得た自身の変化や成長

「LOTUS WEEKEND 2025」では、ワークショップの案内物を準備していなかったと2章で述べた。しかし、その時たまたま持ち合わせていた裏紙と、備品を詰めていた段ボール箱を用いて、簡易的な案内看板を作成した。このアイデアは私ひとりが思いついたわけではなかったが、落ち着いて臨機応変な対応ができるようになったと思う。

また、本プロジェクトでは、実習報告書に加えて note 記事の執筆があったため、現場実習で見聞きしたことをただ記録するだけでなく、外部の人にも分かりやすいように言語化する力がついたと思う。

5. 活動したことによって実習先や地域、他者にもたらした変化や影響

実習先においては、「LOTUS WEEKEND 2025」で清浄華院の前の通りを行き交う人に声をかけ、呼び込みをした。立ち止まってパンフレットを受け取ってくれた方もいれば、声をかけてもそのまま通り過ぎてしまう人も少なくなかった。お寺という空間そのものに関心がない場合や、イベントの内容が伝わりにくかった場合など、素通りされる理由はさまざまであると考えられる。

その一方で、そうした方々にも関心を持ってもらうために、私たち受講生の立場から

できたことはあったのではないかと振り返る。ワークショップを出店させていただいた立場として、当日の呼び込みだけでなく、本プロジェクトの Instagram を活用した、「どのようなイベントなのかが一目で分かる広報」にも、より積極的に関わることができたのかもしれない。

本プロジェクト全体の活動を通じて、私は、自身が他者へ影響をもたらすより、他の受講生から刺激を受けることが多かった。現地実習やイベントの準備はいつも、直前になって大慌てで取り掛かっていたが、中心となって指揮してくれた受講生がおり、やや受動的だった私は助けられていた。しかし、特定の誰かに負担が偏らないように、かつ皆で活動の方向性を統一するために、ある程度の意見が出たら一度整理したり、作業の優先順位を考え提案したりしたことで、円滑なグループワークに貢献できたのではないかと感じている。

6. 活動を通して考えた現代社会におけるお寺の可能性

「葬式仏教」という言葉に象徴されるように、お寺はこれまで、仏事や法要を通して人生の終焉に関わる場所という印象が強くあった。しかし、実際には子どもの学習支援や地域住民が自由に参加できるイベントなど、多様な活動がおこなわれており、お寺はすでに福祉的な役割を担う場として機能し始めていることが分かった。

特に、お寺は特定の年齢層や立場に限定されることなく、人々が集える空間である点に大きな可能性があると考えます。公民館や公園、広場と同様のプログラムを実施できるだけでなく、宗教施設として長年地域に根ざしてきた歴史や精神性を背景に持つことは、人と人とのつながりをより緩やかに、かつ持続的に生み出す基盤にもなり得るのではないだろうか。

現代社会では、地域との関わりの希薄化や、顔の見える人間関係の弱まりによって、孤立が問題視されている。そうした状況において、お寺が「何かを信仰する場」に限定されず、「誰かと居てもよい場」「目的がなくても立ち寄れる場」として認識されるようになれば、地域における新たな居場所として機能する可能性が高まるに違いない。

これらの点から、お寺は単なる宗教施設ではなく、地域社会を支える重要な社会資本として、今後さらにその役割を広げていく潜在力を持っていると考える。

(5) 2025 年度活動報告会の発表ポスター

お寺の可能性を引き出そう！ プロジェクト



このプロジェクトの目的・概要

お寺と聞くと、宗教施設のイメージが強く、無意識のうちに見えない壁を作ってしまう。「葬式仏教」と揶揄される寺院において、地域に開かれた活動は何が行われているのか、またどのような場となっているのかを学ぶ。

前期

前期では、お寺が行っている活動に参加して、お寺と地域の関係について体験的に知ることを目的とした。



西方寺「花地藏まつり」への参加

地域とお寺の関わりを学ぶ機会となり、多くの子どもたちが集い、地域に親しまれている様子がうかがえた。

宗教行事でありながら、子どもたちにとってはお祭りのような存在となり、自然に仏教や寺院に触れられる貴重な機会。

実習では、駐車場整理・会場案内・くじ作りなどを分担して担当。行事の運営には多くの人手が必要であり、担い手不足が今後の課題。地域とのつながりを大切に、行事や役割を次の世代へ受け継いでいくことの重要性を実感。

佛現寺副住職・油小路さんへの インタビューと「てらのみ」

まちづくり班に所属する3名が、多様な取り組みをされている京都市中京区にある佛現寺を訪問。副住職・油小路和貴さんにお話を伺い、また佛現寺で行われている日本酒イベント「てらのみ」に参加した。



法善寺 —お寺の観光と宗教の両立—

夏休み期間には、お寺の観光に関心を持ったメンバーで、大阪・ミナミの繁華街に立地し、「水掛不動尊」で知られる浄土宗・天龍山法善寺へ訪問した。

水掛不動尊を中心に震災から復興し、現在は参拝者の多くが観光客である一方、地域の方が観光客に参拝方法を伝えたり、見回りをしてくれるなど、地域と観光客が混じり合いながらこの場所が支えられているという。人々の関わりの中で、観光・受け継がれてきた信仰の両者が自然に共存している特別な空間であり、副住職が語られていた「自利利他」の精神は、効率やスピードが重視される現代において、一度立ち止まり、他者を思いやる心の大切さを伝えていたようであった。



前期の成果

- ・お寺が行う地域に開かれた活動
→イベント等の取り組みを通じて、子育てや居場所づくりといった役割が、人と人のご縁を紡ぐ場となっていた
- ・お寺の置かれている現状について知る
→多種多様なイベントを知り、体験することで、お寺へのハードルや既存のイメージが大きく変化

後期

清浄華院「LOTUS WEEKEND」への出店

これまでのお寺における実習から、私たちはお寺が地域の人びとにとってつながりを生み出す場となり、居場所として機能する可能性に着目した。具体的には、防災の拠点となったり、子どもや高齢者が集う場となったり、観光という楽しみを提供する場にもなり得る点に関心を持った。こうした気づきや関心を実際の企画・実践として形にする取り組みの一環として、昨年11月15・16日に開催された清浄華院LOTUS WEEKENDに、「防災」をテーマとしたスペースを出店した。

ブース内では、防災ホイッスルのデコレーションや新聞スリッパ作り、防災に関するクイズの掲示などを行った。2日間を通して、来場者数は想定よりも少なかったものの、来場者一人ひとりと深く対話することができ、防災に関する話題や雑談を交えながら、和やかな交流の時間を共有できた。



後期の成果と課題

- ・自分たちで企画をすることの難しさを実感
- ・「お寺=若者（≒新規層）が少ない」を打破する必要があることを知った

このプロジェクトを通じて気付いた課題

寺院側の課題

- ・若者（≒新規層）が少なく、イベント等を開いても寺院関係者が多い
→外部との関わりの薄さ/新たな広報活動の模索
- ・寺院は地域に根ざした施設であるため、個々の寺院ごとに抱えている課題は異なる
- ・各種活動を行うにも、寺院側の資源とモチベーションに依存せざるを得ない状況

プロジェクト側の課題

- ・各活動や企画を練る時に遅々として進まず、特定個人によって運営されていたチーム全体の意見が反映されなかったという見方も
- ・学外調査において、調査対象の事前調査が不足しており、なおかつ事前調査結果のチーム内での共有も不十分であった。



このプロジェクトの展望

- ・イベントを行っても参加人数が少なく、参加する層も偏っているため本プロジェクトの受講生やお寺関係者のみの参加になってしまっている。
→イベントを行うときに他プロジェクトと連携する
- 活動共有会で活動の参加人数や若者の参加が少ないと他プロジェクトも課題に上がっていたので、他プロジェクトと協力してイベントの参加人数を増やす。
- 他プロジェクトと合同イベントを行いお互いに活動を広報し外部との関わりを増やす
- ・コミュニケーションを取り活動内容（イベント内容）をしっかりと考える。
- ・SNSを積極的に活用する
→note記事だけでなく本プロジェクト独自のinstagramやXなども活用して活動内容を幅広い人に共有しプロジェクトの参加人数を増やす



障がいがある子どもたちの放課後支援

担当教員：土田美世子

(1) 取り組みの趣旨・目的

本プロジェクトは「障がいがある子ども達の未来に向けた共生社会の実現」をテーマとする。プログラムでは、放課後等デイサービス「ゆにこ神領」「ゆにこ神領・重心」での実習を通じて、障がいがある子どもたちとの関わり方を学び、子どもたちの未来につながる支援について考える。

一人ひとりの子どもの関わりを通じて得た理解と共感をもとに、「共生社会の実現のために何が求められるのか」について考察を深め、受講生が共に学びあうことを、プログラムの最終目標とする。

(2) 2025年度取り組みの紹介

本プロジェクトは、放課後等デイサービス「ゆにこ神領」「ゆにこ神領・重心」でおこなう週1回の実習を活動の核とする、半期(前期)のプログラムである。前年度までの受講生の学びの様子を考慮し、実習先とも協議のうえ、受講生はどちらか一方の実習先を核としつつ、もう一方の実習先への配属の日を設けることとし、実習先の振り分けをおこなった。

プログラムは、①「ゆにこ」での実習に関連した学内での学習、②基本的に週1回の「ゆにこ」での学外実習、③まとめとしての共生社会実現に向けた考察、の3つのパートから成る。基本的には①から③に向けて時系列で学びを進めていくが、実際には①～③を行きつ戻りつしながら学びを深めていく。

①学内では、まず現場での実習に向けた準備を実施した。学外実習開始後は、各自の子どもたちとの関わり場面を日誌に記述することで振り返り、実習での反省・考察を授業内で受講生が共有し、一人ひとりの子どもの個性、「ゆにこ」の役割について理解を深めていく。プログラム後半では、学外実習のまとめとしておこなう「設定保育」の進め方について増田裕介氏（Y&C株式会社 放課後等デイサービスゆにこ マネージャー）と河合桃子氏（Y&C株式会社 放課後等デイサービスゆにこ 管理者兼児童発達支援管理責任者）から講義を受け、プログラムを実施する際に必要



な様々な配慮について学ぶ機会を得た。

②プログラムの中核となる学外実習に入る前に、オリエンテーションとして、増田氏より、ゆにこ現地で講話を受け、実習に向けた心構えについて指導を得た。



③共生社会に向けた考察としては、学内での実習生同士の話し合いの他、夏のオープンキャンパスにおける活動報告を通じて実施した。オープンキャンパスで高校生に向けて障がいがある子どもたちとの関わりについて、子どもたちが成長していくうえでの「共生社会」の必要性について発表することで、学びを深めることにつながった。



2025年度 Open Campus 報告

障がいがある子どもたちの 放課後支援

実習で学んだことを紹介します



- ・福祉という観点で物事を考えながら、子どもたちと関わり、様々なコミュニケーションの取り方を実践を通して学びました。
- ・支援に完全な正解はなく、支援員の方も日々手探りで子どもたちの支援を考えているということがわかりました。
- ・障がいがある子どもと関わったことで、障がいはハンデではなく個性であると学びました。
- ・以前は障がいと聞くと、大変そうな印象を持っていましたが、個性豊かな子どもたちが、ゆにこでの活動を通じて様々な物事を考え、成長していることを学ぶことができました。

(3) 2025 年度の取り組みの成果と課題

5月連休明けから開始した「ゆにこ」の実習では、その日の利用児童の受け止めのための職員ミーティングから、受け入れ準備又は送迎の同行、活動への参加、後片付け又は家庭までの送迎への同行・終了時のミーティングまでの、半日～1日の実習を実施する。活動の中で学んだことや疑問に感じたことは、主に終了時のミーティングの場で発題し、職員からフィードバックを得た。また、実習後に作成した日誌に「指導を受けたこと」「学んだこと」をまとめ、指導担当者からコメントを得ることで学びを深めた。

今年度は、実習のまとめとして、受講生による「設定保育」の機会をいただいた。「洗濯のりを使ったスライム作り」の設定保育プログラム実施のために、毎回の実習を通じて、子どもたちの個性を理解するように努めた。当日の実施にあたっては、予想外のハプニング等も起こったが、職員の方々のフォローで何とか成功裏にプログラムを終えることができた。受講生にとっては、プログラムの計画・実施・反省の全てのプロセスで学びの機会となった。一方、プログラム担当者としては、事前の協議をさらに充実させることの必要性を感じるようになった。



(4) 受講生の感想

現代福祉学科 4年生 飯山悠

① 活動するうえで直面した困難や葛藤

「ゆにこ神領重心」で初めて医療的ケア児など、重度の障がいがある子どもと接し、実習当初は、児童がどのような反応をするか分からない状態だった。徐々にそれぞれの児童の意思表示の仕方などわかるようになったが、どの程度支援すべきか、例えば食事の時、介助した方が良いのか、自分でできるのを待った方が良いのか等、一つひとつの判断が難しかった。

最後のまとめとして受講生全員でおこなった「設定保育」では、洗濯のりでのスライム作りを実践させていただいた。プログラムの用意の段階で、児童の反応を予測すること、どんな危険があるかを予測し、しっかり対処を考えておくこと等を学んだ。幸い当日は、ゆにこの職員の方のフォローにより、児童がプログラムを楽しむ姿を見ることができたが、反省会では考えておくべきだった危機管理についても指導してい

ただき、日々のプログラムの運営に大切なことについても考える機会を得た。

② 活動したことによるまわりの変化や連携先に対する影響

受講生がゆにこで活動することについては、保護者の方などにもアナウンスされ、楽しみにしていて下さることがわかった。児童たちも、受講生との関わりを楽しんでくれているように感じた。最後の設定保育では、洗濯のりを大量に使ったプログラムなど、受講生が参加したことにより実行できたものもあり、貢献できたのではないかと思う。

活動したことによるまわりの変化は、地域活動に参加する機会がなかったこともあり、あまり感じられなかった。

③ 「社会共生実習」を受講したことで起きた自身の変化や感じた成長

実習で心に残った場面を記録し、心に残った理由を記入し考察することで、自分の関わりを振り返る機会となった。実習先の指導者からも、丁寧なコメントをもらうことができ、学びが深まったと考える。日々の支援は、それぞれの子どもの「個別支援計画」に落とし込んで考える必要性を学んだことは大きかった。4月からは教職の現場で学んだことを活かしていきたいと考える。

(5) 2025 年度活動報告会の発表ポスター



2025年度社会共生実習報告会

障がいのある子どもたちの放課後支援

実習の紹介

小学生から高校生の障害をもつ子どもの生活支援を実施する「放課後等デイサービスゆにこ」での実習を通して、支援のあり方や子どもとの関わり方を学び、障がいをもつ子どもやその保護者にとっての共生社会の在り方について考えるプロジェクトです。



ゆにこでの実習

平日の実習について

- 送迎** それぞれの学校へ、車で送迎に行きます。
- はじまりの会** 手洗いやあい、連絡帳の確認などをいたします。その後の一日の役割をみんなでお話しします。
- おやつ時間** お店の好きなおやつを準備し、みんなで食べます。

- あそび** それぞれがやりたい遊びをします。おやつを食べないで早退にすることもできます。
- 帰りの会** お話を聞いて、褒められる機会をたくさん取り入れる準備を行います。
- 送迎** 各様のお家まで送り、保護者さんにその日の活動の報告をします。

ゆにこ神領

- ・小学生～高校生までの障がいのある子供たちが、集まるからこで得られる経験をしてもらう場所
- ・地域とつながり、共に成長していく
- ・障がいのある人もない人も、共に生きる社会を目指す



重心（重症心身障害児）について

- 写真
・重度の知的障害と重度の身体障害を併発した状態の子供です。
- 特徴
・自力での移動が困難。リフトに乗って移動し、椅子が少く、空間による移動や身体接触の困難。
・非常識な、行動が定まらない。
・保護者からの説明やケアを受けられない。
・こころからの苦しみや悲しみ、寂しさが大きい。

神領との違い

- ・おやつ時間
- ・お話をたくさん聞いたりお話をたくさん聞いたりする。
- ・大きな声で話しかけたりお話をたくさん聞いたりする。
- ・食べることが出来ない子供もいる。
- ・おやつ
- ・絵本やお話など活動を行わない遊びが多い。

設定実習：みんなでスライムを作って遊ぶ

- ・今年度の実習のまとめとして、実習生全員で土曜日の設定実習の時間を企画・運営する機会をいただきました。実習生で話し合い、洗濯のりと中ウツ粉でのスライムづくりのプログラムを実施しました。

- ・子ども達に楽しんでもらえるよう、スライムの量や色、カップの大きさなど、様々な工夫しました。



- ・写真は、スライムの作り方の説明をしているところです。

- ・しっかり混ぜて、巨大スライムの完成！！もちもちスライムの感触をみんなで楽しみました。

- ・自分で作ったスライムを袋に入れて持ち帰ったり、自由遊びの時間にもスライムづくりのリクエストがあったりと子どもたちには好評でした。



- ・作製中に中ウツ粉や食紅を机の上に置きっぱなしにするなど、危機管理が徹底なところもありましたが、職員のサポートもあり無事成功することができました。
- ・準備の大変さと、子どもたちが喜んでくれる充実感とを経験することができました！

- ・食紅で好きな色に色付けしたスライムに、ビーズを混ぜて楽しむ子どももいました。次の日には、ビーズが大好評！



- ・大きな袋に大量の洗濯のりと中ウツ粉を入れて、巨大スライムづくり開始！子どもたちは、洗濯のりを1キログラムごと桶に入れるのに大変でした。



- ・実習生のデモンストレーションのあとは、子どもたちに個別にスライムづくりを実施しました。

- ・写真は、食紅で色付けした洗濯のりと、中ウツ粉を入れているところです。

- ・アムレーの子もいるので、子どもたちはゴム手袋とビーズも準備したスライムを混ぜ、スライムづくりを楽しみました。

関わりの中で意識したこと

・表情や目・体の動きなどを気にかける
 (x)目がパツと開く、手足をバタバタさせる。



・積極的に話しかける(話題は身近なもの・利用者さんなど)
 職員の方がかけてくださった言葉...

・決めつけすぎない、可能性を狭めない

・楽しむ気持ちで関わる



ゆにこの活動で学んだこと

- ・コミュニケーション
- ・→子供たちは各々得意不得意があり、一人ひとりに合うやり方でコミュニケーションをとることが大切。例えば、言葉だけでなく、ジェスチャー等のものに合わせたコミュニケーション。
- ・実際に・・・YZZさんだけのジェスチャーを使って会話をした。
 [人差し指を両頬にあてる⇒ゆにこ]



実習を通して

実習中、接し方が分からず不安になることがありましたが、利用者の笑顔に何度も救われました。

アプローチの仕方は人それぞれで表情やジェスチャー、スキンシップなど、言語では表現できないコミュニケーションを学びました。
 利用者の成長に喜ぶし、見届けるやりがいのあるお仕事でした。

実習で学んだこと



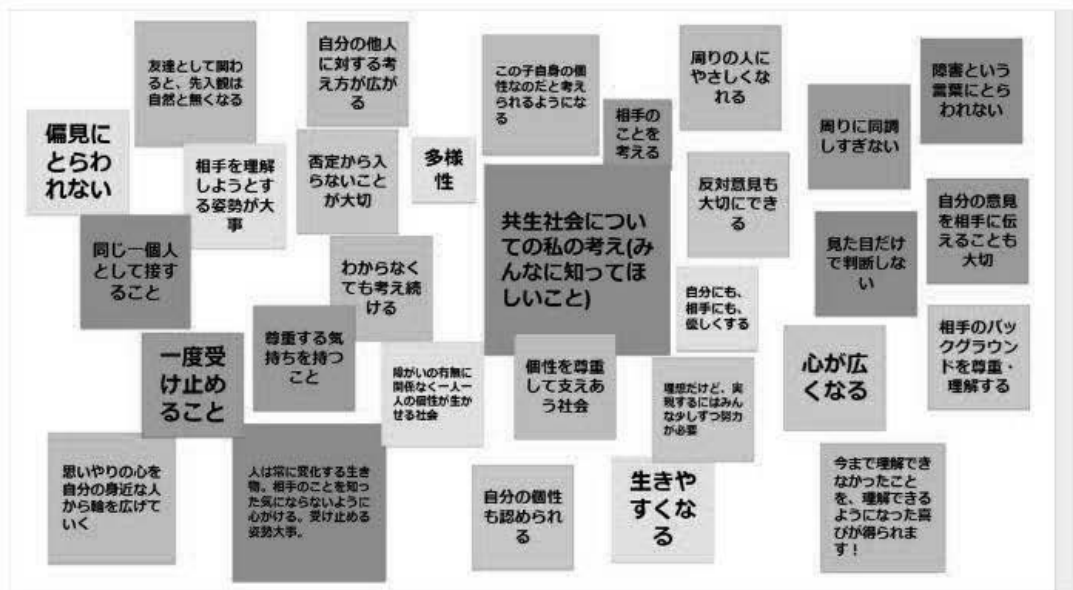
という観点で物事を考えながら、子どもたちと関わり様々なコミュニケーションの取
 (実習を通して学んだ。

1)に完全な正解はなく、支援員の方も日々手探りで子どもたちの支援を考えている
 こと。

1)いを持った子どもと関わったことで、障がいはハンデではなく個性であると学んだ。

1)は障がいと聞くと、大変そうなお印象を持っていたが、個性豊かな子どもたちが、ゆ
 2)の活動を通して様々な物事を考え、成長していることを学んだ。

最後に 「共生社会」について考えました



- ・ ゆにこ神領実習生: 現代福祉学科3回生 大西 凜、安田 愛望
- ・ ゆにこ神領重心実習生: 現代福祉学科4回生 飯山 悠、道下 愛実

コミュニティの情報発信！レク龍プロジェクト

担当教員：久保和之

(1) 取り組みの趣旨・目的

コミュニティの広報活動を学ぶために、各種事業に参加する。事業の補助や広報活動業務を実際に見て体験して学ぶ。社会の少子高齢化や情報化が進むとともにコロナ禍において、地方のレクリエーション協会では、スタッフの高齢化が進み、業務活動の継続が困難な状況が生じ始めている。社会的な組織の重要な業務のひとつに広報活動があり、それを担う人材の育成が重要視されてきている。そこで、地方団体の広報活動について、実践を通して学んでいく。

(2) 2025年度の取り組みの紹介

① 滋賀県レクリエーション協会 運営指導部会に参加

2か月に一度の定例会議に広報部の一員として参加し、広報活動の状況や計画を報告した。また、組織運営についての現状について学んだ。



▲運営指導部会の様子

② 広報部の SNS 発信

「X」「Instagram」「Facebook」の滋賀県レクリエーション協会の公式アカウントを作成し、活動紹介や大会の情報などを発信した。毎回の講義開始時に「今日のレクリエーション」を受講生が実践し、それを SNS 発信材料として利用した。



▲知恵の輪



▲NGワード

X (旧 Twitter)
ID : shiga_rec



Instagram
ID : shiga_rec



Facebook
アカウント名 : 滋賀レク



③ 指導者養成講習会への参加および取材

木ノ本まちづくりセンターで開催された、レクリエーション・インストラクター養成講習会のスタッフとして参加した。受講生とともに講習を受け、ゲームなどのサポートをさせていただいた。



▲講習会の様子



▲風船を使ったゲーム



▲手を使うゲーム



▲左右への判断ゲーム



▲チームじゃんけん



▲新聞紙ゲーム

④ ホームページ作成

広報ツールとしてのWEB発信について理解するために、本プロジェクトの紹介ウェブページを作成した。ホームページの仕組みについて学び、実際にHTMLのタグを使い、プログラミングを体験した。



⑤ 全国レクリエーション大会

2025年9月6日から8日に栃木県宇都宮市で開催された全国レクリエーション大会に参加した。



▲受付後に戦国武将と記念撮影

⑥ 受講生による活動報告

社会学科 森家那奈海

私は3日間を通して4つの研究フォーラムに参加しました。

1日目には開会式と交歓の夕べにも参加して、他の都道府県の協会の方や台湾の参加者の方とも交流しました。

■レコ・ネットが推す実践者のレクを学ぶ～豊富な経験と実践に基づいた「今学びたいレク」を体験する～第2弾

名古屋市考案のタスポニー（スポンジボールを素手で打ち合うテニスに似たニュースポーツ）のボールを使って、まずはボールと触れ合い、その後、タスポニーの特性を知り、ボールを投げ打ち、ボール集めじゃんけんなどリードアップゲームをおこないました。程よく体を動かし汗ばむくらいでとても楽しかったです。体を動かしたあとは頭を使うレクリエーションをしました。コミュニケーション能力を磨くレクリエーション、通称「コミ・レク」の中から、ミニボートを使ったレクリエーションとマス目シートを使ったレクリエーションの活動をしました。対象や場所、時間に応じてアレンジがしやすく頭を使うレクリエーションだなと思いました。グループワークもあったので参加者の方々と交流もできて楽しかったです。



■あなたは言葉の力を信じますか？やる気を引き出す「ペップトーク」

三森啓文氏（講師）よりペップトークについて学びました。ペップトークとは、もともとアメリカのスポーツの現場で試合前に監督が選手を鼓舞するために用いる、短く力強い激励の言葉です。ペップトークの4ステップや、言い方、効果なども学びました。自分や仲間



を励ます三三七拍子のリズムも作りました。普段の友達との関わりの中でも使えるような手法でとても有意義な講義でした。

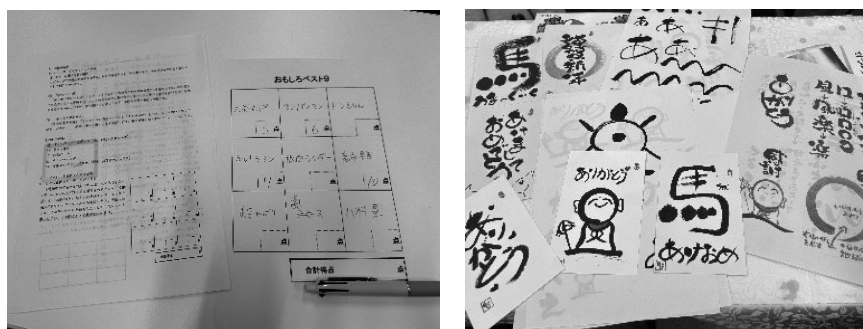
■名古屋発祥の"己書"書いてみやあ

己書という筆ペンを使って味のある文字や絵を、ルールにとらわれず自由に表現する「自分だけの書」を書く体験をしました。上手い下手も無いので、思うがままに書きました。その後に、それぞれかいた書を披露しあって、共有しました。どの参加者のものも可愛く味のある己書で、見ているだけで楽しめました。

■レクリエーションがつなぐ健康とスポーツ

3日目はシンポジウムに参加しました。鈴木大地氏、谷本歩実氏、宇佐美綾乃氏の講話や松尾哲矢氏をファシリテーターとしたディスカッションがおこなわれました。人生百年時代を見据えた心と体の健康づくりについて考え、「楽しさ」を原動力としたレクリエーションの可能性を再発見しました。

3日間を通して、レクリエーションの楽しさを改めて感じ、学びがたくさん得られたいい機会だったと思います。



▲交歓の夕べで台湾からの参加者と交流

■子ども会でウケた！鉄板レク 10 選—子ども会から広がるレク活動の世界—



愛知県子ども会連絡協議会の方々に、子どもたちが楽しめるレクリエーションを実践しながらたくさん紹介していただきました。後出しじゃんけん・バースデーチェーン・ステイック・おはなしキャッチ・しおこしょう・人間知恵の輪・ステレオの7個のレクリエーションを実践しました。

子どもたちに向けてレクリエーションを運営する上で、愛知県子ども会連絡協議会の方々が大切にされていることを学びました。「ゆるやかな集団化」を狙ったレクリエーションから始まり、「自己表現」や「自発的な働きかけ」を狙ったレクリエーションへ移行していきます。最終的には子どもたち自身がグループの中で相談して、それぞれが役割を担う「役割の遂行」のレクリエーションをおこなっていました。子どもにとってレクリエーションは楽しいだけの遊びではなく、成長するために必要な遊びだと知りました。普段から仕事として子どもたちに向けてレクリエーションをされている方々にとっては、どれも有名で鉄板のレクリエーションのようでした。私にはまだまだ知らないレクリエーションがたくさんあることを実感しました。また、参加された全国のレクリエーション協会の方々と交流する時間では、知っているレクリエーションを教え合いました。同じレクリエーションでも個々の工夫で色々な楽しみ方ができるというレクリエーションの良さに気づくことができ良かったです。

■あなたは言葉の力を信じますか？やる気を引き出すペップトーク

試合前に監督やコーチが選手を鼓舞するために言う言葉が基になったペップトークという短く力強い激励の言葉について、三森啓文氏（一般財団法人 日本ペップトーク普及協会 講師）がワークショップ形式で教えてくださいました。

ペップトークは「誰でも、どこでも、すぐに使える、心のエネルギー補給の言葉」として、さまざまな場面で良いコミュニケーションを取ることができるレクリエーションであり、ゲームをすることだけがレクリエーションではないことをペップトークで知ることができました。励ます言葉をかけるには、相手の感情をそのまま受け止めてから相手の努力・存在を承認するというステップがまず必要であると学びました。また、世の中のすべては「陰と陽」であり捉え方次第で変わることや、否定語はペップトークには通じないということを知り、ポジティブに言葉を変換することで人の未来を作れると学びました。自分や大切な人を励ます言葉を三三七拍子に乗せて声に出す「337 ペップ」を実践してみると自然と力が湧き、リズムに乗せた言葉にはエネルギーを高める力があると知りました。相手の気持ちに寄り添う練習は、これからレクリエーションを考える時にも役立つと思いました。どの年齢でもどこでも楽しめるレクリエーションを知ることができて良かったです。



■自然体験プログラムで、子どもたちの心はワクワク、ドキドキ

自然体験活動団体「やよいの会」・愛知県シェアリングネイチャー協会・AMAKARA KiDs がそれぞれ普段行われている活動について教えてくださいました。

近年、室内遊びが増えて子どもたちの自然離れが深刻化しているとのことでした。どの団体もこの問題を踏まえてそれぞれ違う狙いを持って活動されていました。やよいの会は、子どもたちにさまざまな場所でツリークライミング体験の場を提供されています。自然に触れ合っ、達成感・自己肯定感を感じることは子どもたちにとって大切だと学びました。愛知県シェアリングネイチャー協会は、葉っぱを拾って触った感触を分かち合ったり、自然の中でいろんな色を探したり、親子で自然を感じられるイベントをおこなわれています。シンプルに「自然が好き」と感じてもらうことが自然を大切に作る気持ちを作り、環境を守ることに繋がると学びました。AMAKARA KiDs は自然のある場所に子どもが使えるような木材やおもちゃを置いて自由に遊べる場所を設けているほか、みんなで木を使って工作をするイベントをおこなわれています。決まったルールがある遊びをおこなうのではなく、子どもが自分のやりたいことをする場所を提供することで、のびのびと自然を感じられるのだと学びました。

今まで室内遊びのレクリエーションしかおこなったことがな



かったので、外で自然と触れ合うレクリエーションもおこなってみたいと思いました。ツリークライミングも、葉っぱや夕日を見ることも、自然の中で自由に遊ぶことも、みんなで行えば達成感や感動が生まれてレクリエーションになるというのが面白いと思いました。改めてレクリエーションの幅広さを実感しました。

■山崎治美の 5 分で魅了する子ども向けレク～運動あそび&歌あそびレクを進めていく極意を実技体験～

山崎治美氏（一般財団法人 日本ペップトーク普及協会 講師）が子どもからお年寄りまで誰でもできるレクリエーションをたくさん実践してくださいました。誰でも簡単にできるグループワーク、ペアワーク、新聞紙を使って簡単な工作をしておこなうレクリエーションなどさまざまでした。

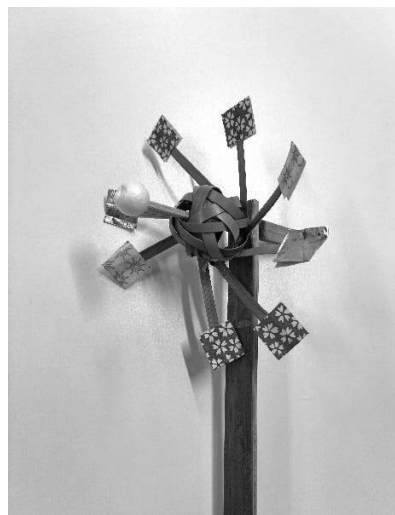
このフォーラムに参加して学んだことは、レクリエーション主催者のふるまい方・歌あそびの面白さです。主催者の山崎氏は、フォーラムが始まると参加者全員にどこから来たのか質問し、積極的に交流を図っていました。レクリエーションの途中でもみんなの笑いを誘うなど、雰囲気がとても明るくなったことでより一層レクリエーションが楽しめる環境になっていました。主催者がみんなに優しくする姿勢や、楽しそうな姿勢は参加している人たちに感染することを学びました。私もこれからレクリエーションをする際は山崎氏のように参加者との交流を大切に楽しみながら進行し、その場の雰囲気を作っていける人になりたいと思いました。また、童謡を使った子ども向けレクリエーションの歌あそびは、大人では盛り上がり欠けると思っていたのですが全員で同じ歌を歌い、体を動かすととても楽しくて会場が笑いに包まれていました。初めての感覚でとても面白かったので、私もレクリエーションをおこなう際は年齢に関係なく歌あそびをおこなってみたいと思いました。

社会学科 南杏奈

■伝承の竹箆玉風車を作ろう

竹箆玉風車作りの体験を通して、失われつつある伝統的な技や、そこに込められた思いを直接感じる事ができた。実際に自分の手で作業してみると、工程の繊細さや難しさを実感し、長年の職人の努力や誇りの大きさを感じた。学校や地域の交流の場でこのような手作り体験会を開催することが、若い世代が伝統技術に触れる貴重な機会となり、次の世代へと受け継いでいくきっかけになるのではないかと考えた。体験会では指導者の人数が少なく、会場もやや狭かったため、奥の席では指導者とのコミュニケーションが取りにくい場面があった。作業中に困った際にも、すぐに相談できない状況があり、見本を見ながら自分で進めるというよりは、指導者にできなかった部分をやらせてもらうという形になってしまい、頼ってしまった部分もあった。一方で、そのような状況の中でも、近くに座っていた参加者同士で教え合い、助け合う場面が自然と生まれていた。この経験から、体験

会を円滑に進めるためには、参加人数に応じた指導者の配置や会場環境の工夫、難易度設定が重要であると同時に、あえて参加者同士が交流し、協力できるような仕組みづくりも有効であると気づいた。運営上の工夫次第で、学びの深さや交流の広がりがより高まると感じた。体験を通して、伝承物の魅力だけではなく、運営面での課題についても考える機会となった。



■「アタック 36」で、楽しさ膨らむ

テレビ番組「アタック 25」と「オセロゲーム」をヒントに考案され、シートやコマを手作りして、介護予防教室や地域のサロンで活用されているゲーム「アタック 36」を体験した。このゲームは4チーム対抗のオセロゲームで、チームで協力しながらどこにコマを置くかを考えながら進めた。この研究フォーラムを通して、特別な道具や準備がなくても、日常にある身近なものを工夫することでレクリエーションに取り入れられることを学んだ。発想次第で誰でも楽しめる活動を生み出せる点に、レクリエーションの奥深さと可能性を感じた。身近な題材を使うことで、参加者の心理的なハードルも下がり、より多くの人が気軽に参加できると感じた。



■名古屋発祥の「己書」書いてみやあ

名古屋発祥の「己書」というデザイン文字を書く体験をした。体験では、上手い・下手といった評価にとらわれず、自分だけのオンリーワンの作品を表現できることが大きな魅力だと感じた。活動中は隣の人と作品を褒め合い、書き方の工夫をしながら進めることができ、自然と会話が生まれていた。完成後の作品を発表する場では、前向きな言葉が多く飛び交い、とても暖かくて素敵な時間であった。レクリエーションというと遊びや体を動かすという印象を持ちがちであるが、「己書」のように表現を通して人と関わるレクリエーションもあることを知った。表現活動であっても、互いを認め合い、言葉を交わす中で人とのつながりが生まれる点に、レクリエーションの新たな魅力を感じた。



■開発現場から直接学び体験する！認知症予防に向けた運動「コグニサイズ」

MCI（健常と認知症の中間段階で、記憶力などの低下はあるが日常生活は自立している状態）の段階で、運動と認知トレーニングを組み合わせた「コグニサイズ」は、認知機能の低下を抑制する効果があることが明らかになった。体を動かすことと、考えることを同時におこなうため、思わず間違えてしまう場面も多かったが、その失敗を参加者同士で笑い合える雰囲気が印象的であった。間違えることが許される空間であるからこそ、緊張せずに参加でき、自然と場が和み一体感が生まれていたと感じた。また、正解を求めることより、一緒に体を動かし楽しむことに価値が置かれているため、年齢や運動能力に関係なく誰もが参加しやすいレクリエーションであると感じた。心身の健康を支えるだけでなく、人とのつながりや前向きな気持ちを生み出す点に魅力があると思う。

現代福祉学科 岡本泰太郎

■子ども会でウケた！鉄板レク10選～子ども会から広がるレク活動の世界～

11月1日、第77回全国レクリエーション大会にて、最初に参加したワークショップでは、子ども会に特化して活動をしてきた愛知県子ども会連絡協議会専門指導者会により、

60年以上にわたる子ども会のレクリエーション実践から「これはウケた！」というネタをご紹介します。

子ども会とは、地域の子どもたちが集まり、さまざまな活動を通じて交流や学びを深めるための団体です。主に小学生以上を対象とし、遊びやスポーツ、文化活動、ボランティアなど多彩なプログラムを提供しています。子どもたちは、友達と一緒に楽しい時間を過ごしながらか、協力やコミュニケーションの大切さを学びます。また、地域の大人たちとの交流を通じて、社会性や責任感を育む場ともなっています。子ども会は、子どもたちの成長を支える大切なコミュニティです。

ワークショップでは、7つのレクリエーションをご紹介します。1つ目にあとだしじゃんけん。2つ目にバースデーチェーン。3つ目にスティック。4つ目におはなしキャッチ。5つ目にしおコショウ。6つ目に人間知恵の輪。7つ目にステレオです。これらの共通するポイントとして、子どもにレクリエーションは楽しいと思ってもらうことや子どもたちを集団として楽しませること、コミュニケーションが集団の特徴を決めるということをおかすことが重要であると学びました。これらのレクリエーションをおこなうなかで最後にあるべき姿は、子どもたちが自分たちで考え、自分たちで行事・組織を運営することですが、実態としては難しいということでした。あつという間のワークショップでしたが、子ども会という分野に触れ、多くを学び、無事終了しました。

■社会的な地域の問題にコミットする・レクリエーションのアプローチを考える

11月1日、第77回全国レクリエーション大会にて、二つ目に参加したワークショップでは、大垣市レクリエーション協会事務局長と山口県レクリエーション協会専務理事・事務局の方々による社会問題解決のためにレクリエーション活動の持つ「楽しさ」を活かすことができないのかということについて学びました。

社会問題とは、社会の中で多くの人々に悪影響を及ぼし、社会全体での対応や改善が求められる課題のことである。個人の努力だけでは解決が難しく、社会の仕組みや制度、経済状況、文化的背景などが深く関わっている点が特徴である。社会問題は時代や地域によって異なり、また社会の価値観の変化によって「何が問題とされるか」も変わる。例えば現代日本では、少子高齢化や人口減少、経済格差、長時間労働、環境問題、教育格差、インターネット上の誹謗中傷などが代表的である。これらの問題は特定の個人だけでなく、多くの人々の日常生活や将来に影響を及ぼすため、政府による政策、企業の取り組み、地域社会の支援、国民一人ひとりの意識改革など、複数の主体が協力して取り組む必要がある。また、社会問題は互いに関連し合うことが多く、単一の解決策では不十分な場合もある。そのため、原因を多角的に分析し、長期的な視点で対策を講じることが重要である。

ワークショップでは、岐阜県と山口県での取り組みやこのワークショップに参加していた他府県の方の取り組みを聞く機会を得られたことやそれぞれの県の特徴などをとらえた活動を知ることができた。まだ、これらの問題を解決できているわけではないが、社会

問題解決のためにレクリエーション活動の持つ楽しさを活かし、社会問題にコミットするレクリエーションの可能性を探っていくことがこれからの課題であるとともに重要なポイントであると感じた。



■アジア・アジアパラ競技大会と一緒に、愛知・名古屋を満喫しよう！

11月1日、第77回全国レクリエーション大会にて、三つ目に参加したワークショップでは、(公財)愛知・名古屋アジア・アジアパラ競技大会組織委員会の方々より、2026年に愛知県と名古屋を中心に開催される第20回アジア競技大会および第5回アジアパラ競技大会で大会・競技を観戦し、スポーツの醍醐味や大会の楽しさ、見るべきポイントを教えてくださいました。さらに、スポーツについてのお話だけでなく、愛知県・名古屋市の素晴らしい名所、美味しい食事なども教えていただきました。また、皆さんが期待している種目や競技、一個人として注目している種目や競技を知ることができ、この大会にしかない良さや特徴を知ることができました。来年開催されるということで皆さん気になる種目が何かしらはあると思うので、現地まで足を運んで愛知県の観光も忘れず行ってほしいと思いました。

■「愛を育み 知を集める GWT」～笑顔と会話で広がるグループワーク・トレーニングの輪～

11月2日、第77回全国レクリエーション大会にて、最初に参加したワークショップでは、三好良子氏(講師)と斎藤聖子氏(講師)のグループで課題を解決するワークに参画して、内省を未来につなげるということや新しい「楽しいをつくる」に遭遇して、みんなが求める新しいニーズと一緒に叶える未来型レクリエーションにGWT(グループワークトレーニング)を活かすことを学びました。

GWT(グループワークトレーニング)とは、ゲーム性のある課題にグループで取り組

み、話し合いや振り返りを通じて、人間関係づくりに必要なスキル（協調性、コミュニケーション力、リーダーシップなど）を「体験的に学ぶ」グループ学習法です。目的はパティシペーターシップ（グループの一員として主体的に課題解決に参加・協働する意識のこと）を高めることによって、人間関係を養うことにあります。人間関係を豊かにする術を身につけるための技法です。本当の自分に出会い、気づき直しをします。人間関係力を磨く為に、豊かに楽しく集い、楽しく修得する姿勢を確立します。効果は、ファシリテーターやアドバイザーの支援により、グループの持つ力を活用し、個人とグループの成長を図り、自律した人間形成をめざした行動変容を促進します。それは受信力と発信力にも表れると共に、自己への気づきを増し他者を肯定的に受容してソーシャルスキルの修得を目指します。

ワークショップでグループワークを経験して最も強く感じたのは、協力することの大切さと、他者の視点を理解する姿勢の必要性です。活動では、ゲームや共同作業を通してメンバーと相談しながら進める場面が多くありましたが、その中で、同じ課題に向き合っても人によって考え方や感じ方が異なることを実感しました。自分の意見を押し通すのではなく、周囲の意見を丁寧に聞き、折り合いをつけることで初めてグループとしての成果が生まれることを学びました。また、レクリエーションの場では楽しさが共有される一方で、役割分担や時間調整などの細かな連携が欠かせず、メンバー同士が積極的に声を掛け合うことの重要性にも気づくことができました。活動を通して、円滑なコミュニケーションがチームの雰囲気高め、結果として参加者全員の満足度につながるという実感を得ました。今回のグループワークで得た学びは、今後の協働作業や日常生活の人間関係にも活かせる貴重な経験になったと感じています。

現代福祉学科 西田大介

■愛知発祥のレクリエーションスポーツ秘話！～レクリエーション創作のヒントを探る～

有本征世氏（特定非営利活動法人 アイディアC体創協会 会長）をはじめ、師岡文男氏（日本フライングディスク協会 名誉会長）などからレクリエーション創作の背景、歴史、パネリストの方々によるパネルディスカッションを聞くことができました。



今回のお話を聞いて、レクリエーションは単なる遊びではなく、人と人をつなぎ地域を活性化させる重要な役割を持つことを学びました。ドッチビー、タスポニー、クロリティーなどは、誰でも安全に楽しめるよう工夫されており、年齢や体力差を超えて参加できる点が特徴的でした。これらのスポーツは、既存の競技をもとにしながらも、ルールや用具を改良することで新しい価値を生み出しているところが印象的でした。また、創作の背景には普及への苦労や運営面での課題もあり、それらを乗り越えることで現在の発展につながっていると理解しました。今後は、参加者のニーズや社会環境の変化に応じた柔軟な発想が、レクリエーション創作において重要であると感じました。

■～手軽にできて効果もある～室伏広治考案「紙風船エクササイズ」

昔の遊びとして使われていた紙風船を使って、紙風船をつぶさないように実際にさまざまなエクササイズをおこないました。

室伏広治氏（東京科学大学 教授／副学長（スポーツサイエンス担当））が考案した「紙風船エクササイズ」について実際に体を使って学びました。紙風船という身近で懐かしい道具を用いながら、力の入れ方や身体の使い方を工夫することで、子どもから高齢者まで幅広く実践できる点が印象的でした。特に、紙風船をつぶさないようにしながら最大限の力を発揮するという発想は、従来の筋力トレーニングとは異なり、楽しさと安全性を両立していると感じました。やってみるといつもより多くのところに意識を向けないといけませんでした。また、実際に体験的に学ぶことで、レクリエーションが健康づくりや身体機能の向上に大きく寄与する可能性を理解できました。今後は、誰もが気軽に参加できる運動として活用していきたいです。



■アジア・アジアパラ競技大会と一緒に、愛知・名古屋を満喫しよう！

2026年におこなわれるアジア競技大会・アジアパラ競技大会は、開催場所である愛知県名古屋市の魅力の世界に知ってもらえる機会にもなります。

今回のセッションを通して、2026年に開催されるアジア競技大会・アジアパラ競技大会が、単なるスポーツイベントではなく、愛知・名古屋の魅力を国内外に発信する大きな機会であることを学びました。大会の成功には競技運営だけでなく、観光や食文化、地域の特色をどのように伝えるかが重要であると感じました。また、アスリート委員会

やメディアなど多様な立場の人が連携しながら準備を進めていることを知り、大規模大会は多方面の協力によって成り立っているのだと理解することができました。スポーツを「見る」だけでなく、「地域と結びつけて価値を高める」という視点の大切さを学びました。

■レクリエーションがつなぐ健康とスポーツ持続可能な健康長寿社会の実現に向けて

健康社会の実現のために欠かせないことが日常的に体を動かすことであり、そのうえで有効なのがレクリエーションです。鈴木大地氏（順天堂大学教授）や谷本歩実氏（日本オリンピック委員会（JOC）理事）などの金メダリストの方々から貴重なお話をいただきました。

健康づくりにおいてレクリエーションが果たす役割の大きさを学びました。健康長寿社会の実現には医療や介護の充実だけでなく、日常的に体を動かす習慣づくりが重要であり、その入口として誰もが気軽に参加できるレクリエーションの価値は高いと感じました。競技スポーツはハードルが高いと感じる人でも、「楽しさ」を軸にした活動であれば参加しやすく、継続的な運動習慣の定着につながると思いました。また、子どもから高齢者まで世代を問わず交流が生まれ、心身の健康だけでなく社会的つながりの形成にも寄与することを学びました。スポーツを特別なものではなく、生活の一部として取り入れる視点の重要性を学ぶことができました。

（3）2025 年度の取り組みの成果と課題

本プロジェクトは前年度から引き続き、4年目であった。昨年が続いてベースができたうえでの活動となった。全体的に見ると成果があったように思われる。まずは、昨年に引き続き、何度も現場に出向いてたくさんのことを学ぶことができた。実際に現場に出向いて活動することによって、それぞれの事業について身をもって理解できたと思われる。滋賀県レクリエーション協会という団体の情報発信がメインであったが、まずは現状を知るとともにその解決方法を探り試行錯誤していくというプログラムであった。

活動のひとつである SNS 発信は前年度に引き続き、理論的背景を学んでいくつかの技法を試したものの昨年のようにバズる発信はできなかった。ただ、対面でオフラインのコミュニケーションをとることによりフォロワー数や閲覧数を伸ばすことができた。

昨年に引き続き、全国レクリエーション大会（名古屋市）に参加し、全国のレクリエーション実践者の研究発表や実践報告を聞くことができ、参加者との交流をとおして課題解決に向けてあらたな側面を知ることができた。

今年度は社会学部が深草学舎へ移転したため、京都府レクリエーション協会との協同をする機会も設けた。ファミリー向けのイベントのスタッフとして、実際に現場で指導体験をすることができた。

課題としては、受講生の人数が増えたことによる役割の減少があげられる。今年度は講習会やフロートレースが減ったことにより、現場での活動が減少した。また、地域での活動は、祝日や夜間に開催されることが多く、サークル活動やアルバイトとの兼ね合いで参加できない受講生が見られた。

(4) 受講生の感想

社会学科 2年生 南杏奈

活動を進める中で最も困難に感じたのは、Instagram や X 、 Facebook などの SNS の運用方法がわからなかったことである。どのような投稿をすれば活動内容が伝わりやすいのか、どの層に向けて発信しているのかを意識することが難しく、見てもらえる工夫について悩むことが多かった。また、文章や写真の内容ひとつで受け取られ方が変わるため、どうすれば多くの人に興味を持ってもらえるのかを考えながら試行錯誤する必要があった。

本実習では、滋賀県レクリエーション協会と連携させていただき、さまざまなレクリエーション活動に参加した。実際に活動をおこなう中で、レクリエーションには年齢や立場を超えて人と人をつなぐ力があることを実感した。参加者同士の自然な交流が生まれ、場の雰囲気明るくなる様子から、レクリエーションは生活の質を向上させ、生きがいにもつながるものだと感じた。この活動を通して、レクリエーションの持つ魅力や価値を改めて知ることができた。全国レクリエーション大会やレクリエーション・インストラクター養成講座への参加を通して、レクリエーションの進め方やその効果について具体的に学ぶことができた。これまで人前で話すことが苦手だと思っていたが、レクリエーションを通して同じ時間を共有することで自然と会話が生まれ、人との距離が縮まりやすくなることに気づいた。活動前よりも、人と関わることへの不安が軽減され、コミュニケーションに前向きになれたと感じている。今後は学んだレクリエーションの知識や技術を日常生活や将来の活動にも活かしていきたい。



コミュニティの情報発信！ ～レク龍プロジェクト～



レクリエーション・HP作成

- ・毎週、授業の初めに個人で考えてきたレクリエーションを5分程行い関係性を深める。
- ・HP作成では昨年に制作されたレク龍メンバーページとホーム画面をテーマを決めて改めて作り直し。

●学んだこと

レクリエーションが人と人とのコミュニケーションを促進する効果があること。

HP作成では基本であるHTMLやCanvaを用いたデザイン。

マンカラ大会

滋賀県レクリエーション協会が主催するマンカラ講習・マンカラ大会に参加。

トーナメント形式の対戦で盛り上がり、小学生からご年配の方まで、世代を超えた交流の場となった。

●学んだこと

年齢関係なく楽しめるマンカラの良さと、地域でイベントを開催することによって普段関わることの少ない世代との交流が可能になるということ。



レクリエーション・インストラクター 養成講習会

長浜市の木ノ本まちづくりセンターで開催された全3回の講習会にお手伝いとして参加。

第1回はアイスブレイクから始まり、受講生と一緒に沢山のレクリエーションを实践。

第2回、第3回では、受講生が主体となり、それぞれが考えたレクを指導してくださったものに参加。ほかにも、新聞紙や紐、ビーズなどを用いてクラフトもおこなった。

●学んだこと

レクリエーションインストラクターの高齢化が進んでいることが分かった。私達若者が情報発信していくことで、特に若者の指導者を増やすことは実現可能になる。若者の勢いが必要不可欠である。

全国レクリエーション大会

全国レクリエーション大会の参加
10月31日、11月1日、11月2日の3日間に渡り、愛知県名古屋市で行われた第79回全国レクリエーション大会に参加
研究フォーラム
大会には多種多様な研究フォーラムが開催
私たちは分組して16個のフォーラムに参加
交友の少べ
初日の夜に他府県の方々との交流を深めるために行われた会で、来年開催される熊本県の方々との披露宴があり盛り上がった。
食事を通し、他府県の方々とお話する機会がたくさんあり、交流をすることができた。

●学んだこと
レクリエーションがこの先生きていく中で必要不可欠なものであり、大切であることを学んだ。福祉にかかわらない仕事に就いたとしても必ず必要になっていくものであるし、何よりレクリエーションを日ごろ行っている人の姿勢などを知ることができた。また日頃SNSをこの実習で上げているが、他府県の方が見たことあるや知っていると言っていたので発信できているのだと確認することができた。また、レクリエーションに関係ないと思っている人を巻き込むことで、知ってもらうということが課題だと認識することができた。



広報

X、Instagram、Facebookを活用した情報発信。
活動内容をより多くの人知ってもらうことを目的とし、イベントの告知、滋賀県レクリエーション協会主催の会議やイベントの参加報告、お便りの発行、日々のレクリエーション活動の紹介などを発信。

●課題
更新頻度が一定せず、発信のリズムを作ることができなかった。
去年のように"バズる"投稿ができなかった。
●学んだこと
計画的な投稿のスケジュールの必要性や見る人を意識した発信の重要性を学んだ。



まとめ

今年度は今年度と比べてSNSの活動があまり頻繁に投稿できなかった。
毎回の授業でのレクリエーションなどはレクリエーション・インストラクター講習会に参加してからレクの幅が広がり、有意義な時間となった。
全国レクリエーション大会では参加者との交流が生まれたり、各レクリエーションの現状やレクリエーションについて知るきっかけとなった。
毎週のレクを考える際に適度な難易度の設定が難しかったり、HP作成では見やすさや伝えたいことを色や文字の配置の仕方を学ぶことができた。

発信情報

WEB

龍谷大学社会学部「社会共生実習」公式ウェブページ

URL : <http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/>

メディア

- ① 2025 (令和7) 年12月14日 / 中日新聞



地域と親子がつながる居場所づくりへ
龍谷大社会学部の学生らによる親子で絵本などが楽しめるイベント「なかまのひみつきちーえほんじかんを楽しもうー」が13日、大津市長等のナカマチスタジオであった。

大津市中央学区を拠点に、住民らと連携し、地域の困り事を解決する社会共生実習の一環。学生たちが住民に聞き取りをする中で、「商店街を訪れる小さな親子連れが減少している」という声があり、大学に寄贈された絵本を活用して親子で楽しめるイベントを初めて企画した。

この日はクリスマスや動物などをテーマにした絵本を100冊ほど用意。マットを敷いて自由にくつろげるスペースをつくった。スタジオはオラス張りですが外からも雰囲気分かるようになっており、商店街に買い物に訪れた親子が、学生たちに絵本を読み聞かせてもらっていた。

2年の松尾成美さん(19)は「商店街に人と触れ合いながら親子でゆっくり過ごせるスペースをつくれたら」と話した。

年度内に数回ほど開く予定。次回は来年1月17日に同所で。予約不要、入場無料。午前10時～午後2時。
(青山尚樹)

子どもに絵本の読み聞かせをする学生「大津市で」

- ② 2026 (令和8) 年1月18日 / 京都新聞

親子の“ひみつきち”、商店街に

絵本使い居場所づくり



龍谷大の学生が、大津市中部のナカマチ商店街で、親子が安心して遊べる居場所づくりに取り組んでいる。節制的に絵本を使ったイベントを開くなど、商店街の賑わいをとり地域福祉の美談を目指す試みで、利用者からは「商店街にいきつけにな」と好評を得ている。

龍大生ら大津で取り組み

取り組むのは同大社会学部。場所づくりに乗り出した。のり、地域連携型の実習の一環で、住民と地域の課題を解決しようと昨年、商店街の現状などを聞き取り調査を行った。結果「親子連れが減少している」「遊びを維持するのが難しい」などの声があり、親子が気軽に立ち寄れる絵本を使った居場所づくりを企画した。

居場所は、同商店街のレンタルスペースを活用。かつ上学的に寄贈された約100冊の絵本を持ち込み、「ナカマチのひみつきち」と名付けた。昨13日の活動スタートで、初回は「ひみつきちのインスタグラム」による紙芝居の上演を予定していた。

同大2年松尾成美さん(19)は「この場所でも読みながら親子連れ同士のつながりができればいい」と期待する。学生たちは2月にもイベントを準備している。詳しくはナカマチのひみつきちのインスタグラムで。

1月17日は、お絵かきや紙コップの工作などを楽しんだ。参加者はおもちゃのひみつきちの読み聞かせや、お絵かき、お絵かきを通して、親子の絆を深めたいという思いを込めて、お絵かきや紙コップの工作などを楽しんだ。

同大社会学部、会津川原文さん(44)は「親子の絆を深めたい」と話した。

と訪れ、「近々の商店街で家族で楽しめる場所があるのはい」と話した。

「学生による絵本の読み聞かせを楽しみ、親子連れ大津市長等と目撃」商店街に開設されたナカマチのひみつきち

龍谷大学 社会学部

2025 年度 社会共生実習 活動報告書

2026 年 5 月 発行

発行元 龍谷大学 社会学部

住所：〒612-8577 京都府京都市伏見区深草塚本町 67

TEL：075-645-2304 FAX：075-585-6377

E-mail：shakai@ad.ryukoku.ac.jp

URL：http://www.soc.ryukoku.ac.jp/department/info/training/



公式 Web サイト



公式 X



公式 Instagram



公式 Facebook

龍谷大学社会学部社会共生実習の
公式 Web サイト・公式 SNS では
最新の情報を随時更新しています！